

児童生徒の職業観・勤労観を育む教育 の推進について

(調査研究報告書)

平成14年11月

国立教育政策研究所生徒指導研究センター

ま え が き

子どもたちの職業観・勤労観の形成をめぐる、今日ほど様々に論議されたり、危ぶまれたりしたことはなかったのではないのでしょうか。その背景には、産業・経済の構造転換や労働市場の多様化・流動化などに伴って、社会全体に先行きへの不透明感が増幅し、そうした世相を反映して、子どもたちの世界に、漠然とした閉塞感や無力感が広がっていることなどが考えられます。また、かつてない厳しい就職状況や大学等への進学者の急速な増加など、進路をめぐる環境が激しく変化する中で、フリーター志向やモラトリアム傾向が若者全般に広がっていることを危惧する指摘も少なくありません。

こうしたことを受け、本調査研究では、関係する調査結果等を幅広く収集し、子どもたちの職業観・勤労観の現状及びその形成過程、特に、学校教育における取組の現状や課題を分析し、今後、子どもたちにどのように指導・援助を行っていけばよいかについて、その基本方向を検討することとしました。

職業観・勤労観の形成は、子どもたちの内面の成長・発達と深くかかわると同時に、時代や環境の変化に大きく左右される事柄です。そのため、検討に当たっては、子どもたちの発達の変化や発達課題を明らかにするとともに、そうした課題の達成に必要な能力・態度を幅広く取り上げ、各学校段階ごとに具体的に示すことに留意しました。その結果を小・中・高等学校を通じた「児童・生徒の職業観・勤労観を育むための学習プログラム（例）」としてまとめています。

確固とした職業観・勤労観を持って力強く生きていくことが強く求められる今日、その基盤を培う学校教育、とりわけ進路指導の取組の重要性はますます高まっています。本報告書が、各学校のそうした取組の参考として活用されることを願っています。また、当生徒指導研究センターでは、今後、この報告書に、小・中・高等学校の事例を加え、校種別にそれぞれ指導資料を作成する予定にしていますので、皆さんからの忌憚のない御意見や指摘をいただければ幸いです。

最後になりましたが、お忙しい中、本調査研究における分析や実地調査及び報告書の作成等に御協力をいただきました調査研究協力者各位、並びに、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成14年11月

国立教育政策研究所生徒指導研究センター長

月岡英人

目 次

第1章 今、なぜ、「職業観・勤労観」の育成が求められるのか	1
第1節 子どもたちの進路・発達をめぐる環境の変化	1
1 高校生の進路状況の変化	1
2 生活体験・社会体験等の機会の喪失	7
3 経済的な豊かさの実現と価値観の多様化	9
第2節 子どもたちの職業観・勤労観の現状とその育成をめぐる新たな状況	11
1 子どもたちの職業観・勤労観の現状	11
2 職業観・勤労観の育成が不可欠な「時代」	18
第2章 職業観・勤労観を育む教育の意義	20
第1節 職業観・勤労観の定義	20
1 職業観・勤労観とは何か	20
2 「望ましい職業観・勤労観」とは何か	21
第2節 職業観・勤労観の育成に取り組むに当たっての基本的な考え方	24
1 学ぶこと・働くことへの意欲を高める	24
2 職業観・勤労観の形成過程を支援する	26
第3章 今、進路指導の在り方の何が問われているか	28
第1節 学習指導要領における進路指導の位置づけの改善	28
1 小学校	28
2 中学校、高等学校	28
第2節 進路指導の改善・充実に向けた主な課題	31
1 「進路指導」に対する正しい認識の共有	31
2 指導内容・方法等の改善・工夫	32
3 計画的・組織的な進路指導の展開	36
4 産業・経済社会の現実についての的確な情報提供	38

第4章 職業観・勤労観を育む進路指導をどのように進めるか	40
第1節 職業的（進路）発達と諸能力の育成	40
1 職業的（進路）発達段階と進路指導	40
2 学校段階における職業的（進路）発達課題	41
3 職業的（進路）発達段階を踏まえた諸能力と態度の育成	43
第2節 職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）	44
1 学習プログラムの枠組み（例）の構造	44
2 学習プログラムの枠組み（例）の活用にあたっての留意点	45
3 職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）	47
参考1 小学校（中学年）における係活動の展開（例）	50
参考2 中学校における職場体験活動を中心とした展開（例）	52
参考3 高等学校におけるインターンシップを中心とした展開（例）	54
参考資料	57
報告の概要	85

第1章 今、なぜ、「職業観・勤労観」の育成が求められるのか

今日、高校生、大学生等を問わず、フリーター志向やモラトリアム傾向の拡大が見られ、一部に職業的アパシーといった状況も見られる。また、上級学校への無目的・不本意入学、入学後の中途退学や怠学等などの学校不適応が増加するとともに、就職後の早期離職が依然として高い水準で推移しており¹⁾、学ぶこと・働くことへの意欲や態度、職業観・勤労観の形成をめぐる各方面から様々な課題が指摘されている。

このような背景には、社会の変化やそれに伴う子どもたちの成長・発達の変化など、様々な要因が考えられる。特に、近年、経済・産業の構造的な転換や採用・雇用の多様化、労働市場の流動化が急速に進む一方、少子化による若年人口の減少等によって、大学等上級学校の入学者受け入れ枠が実質的に大幅に拡大するなど、若者の進路選択をめぐる環境は大きく変化しており、こうしたことが、職業観・勤労観の形成をはじめとする若者の自立及び学校から職業生活への移行にかかる様々な課題を、これまで以上に大きく顕在化させているのではないかと考えられる。

また、企業における社員研修や人材育成等の在り方も変化し、一括採用した新規学卒者を育てていこうとする姿勢や体制が全体として弱くなっている。さらに、終身雇用や年功序列型賃金体系等が崩れ、学校を卒業し一度就職した後にあっても、生涯にわたって何度か職業生活にかかる重要な選択を迫られるといった状況が次第に拡大している。こうした中で職業人としての資質の育成について、学校教育に課せられる部分が大きくなっている。

このような時代を生きていく子どもたちに強く求められるのは、変化に流されることなく、自立した個人として自らの将来を主体的に切り拓いていく力であり、その基盤となる意欲や態度及びこれらを根本において支える職業観・勤労観である。若者の進路選択とりわけ学校から職業への移行が、量的にも質的にもこれまでになく困難に直面している今日、学校教育において、子どもたち一人一人が望ましい職業観・勤労観をしっかりと身に付けることができるようにする取組の充実・改善が強く求められている。

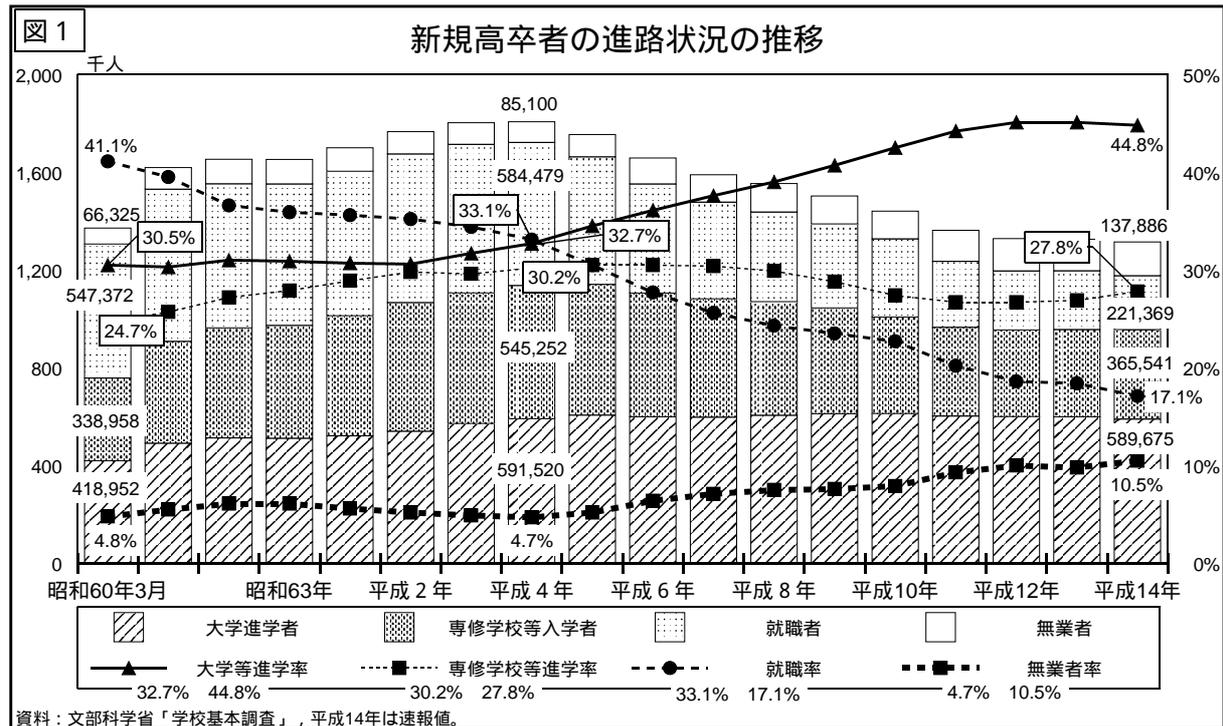
第1節 子どもたちの進路・発達をめぐる環境の変化

1 高校生の進路状況の変化

1) ...P59 資料1「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」参照

中学校から高等学校への進学率が97%に達し、ほとんどの生徒の後期中等教育機関への進学が現実のものとなった現在、子どもたちの進路選択における最も大きな分岐点となっているのが、高等学校卒業段階である。したがって、若者の進路意識及び進路を取り巻く環境の変化は、この時点での進路選択等の状況として端的かつ集約的に表れてくると考えられる。事実、この10年足らずの間に、高校生の進路状況は、就職率の下降、大学等への進学率及び無業者率の上昇という顕著な変化を示している（図1）²⁾。

以下、こうした観点から、高校生の進路状況の変化とその背景を見ていきたい³⁾。



(1) 進学をめぐる状況

近年、高等学校を卒業した者のうち、上級学校に進学する者の割合は急速に高まっている。平成14年3月卒業生で、その翌年度に上級学校に進学した者の割合（いわゆる現役進学率）は、大学・短期大学、専門学校（専修学校専門課程）を合わせ62.9%に達する。また、18歳人口（3年前の中学校卒業生）に占める高等教育機関進学者の割合を見ると、大学・短期大学への進学者は約5割、高等専門学校（第4年次在学者）、専門学校を含めた高等教育機関全体への進学者は実に7割余りに及んでいる⁴⁾。

このような進学率の上昇の背景には、家庭の経済的なゆとりが増したことや高学歴志向

2) ...実数等の詳細は、P60 資料2 参照

3) ...長期の推移及び大学、短期大学卒業生の状況は、P61～P63の資料3～5 参照

4) ...P64 資料6 「18歳人口に占める高等教育機関進学者の割合」参照

などとともに、「少子化の進行，依然として増加する大学入学定員，多様化する選抜方法，推薦入学の増加等により，客観的に見れば，相当数の者にとっては，大学受験は既に必ずしも『過度の競争』ではなくなっている」(中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」(平成11年12月))という状況(図2)⁵⁾や，専門学校では実質

図2		4年制大学の入学者定員と入学者数								
	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	
入学定員	486,740	493,135	498,913	505,961	515,735	524,807	535,445	539,370	543,319	
入学者数	560,815	568,576	579,148	586,688	590,743	589,559	599,655	603,953	609,287	

資料：入学者数は文部科学省「学校基本調査」、平成14年度は速報値。入学定員は文教協会「全国大学一覧」。

		短期大学の入学者定員と入学者数								
	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	
入学定員	199,915	197,370	194,080	191,325	184,580	176,280	152,071	140,908	126,590	
入学者数	244,895	232,741	220,875	207,546	191,430	168,973	141,491	130,246	121,447	

資料：入学者数は文部科学省「学校基本調査」、平成14年度は速報値。入学定員は文教協会「全国短期大学一覧」。

的に開放入学制をとっていることなどが考えられる。

高等教育機関への入学が容易になっているという事情が、「大学に合格するため」という学習への動機を低下させたり，さしたる努力をしないまま，とりあえず入れる大学に進学し，将来のことはそれから考えようとする態度につながったりする場合も考えられ，大学等で何を学びたいのかはもちろん，学ぶことへの意欲の乏しい生徒が，相当数大学に入ってくるという状況を招いていることも否定できない。

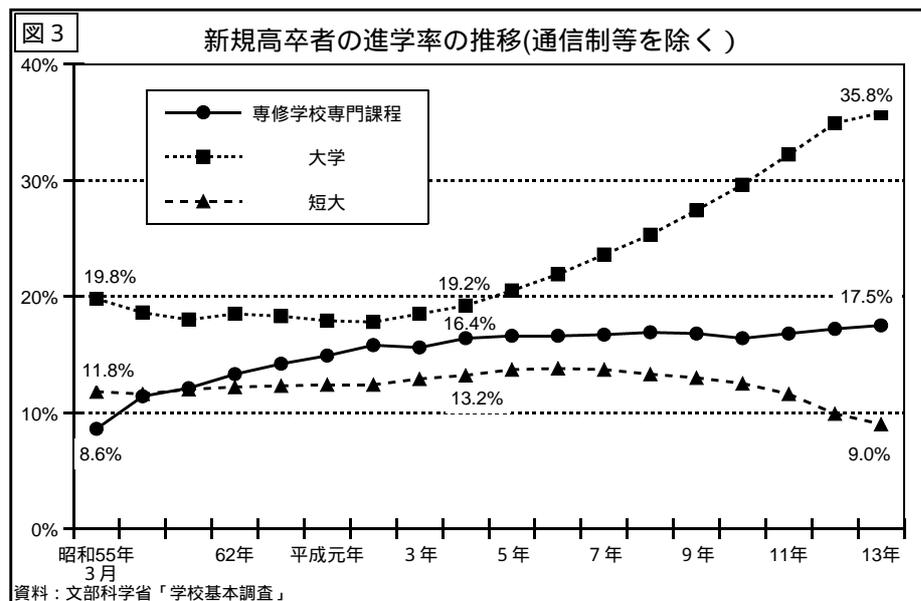
一方，生徒・保護者等には，少しでも「よい大学」に入学した方がその後の就職や人生に有利であるとする「学(校)歴意識」が依然として根強く，そうした意識が，偏差値に大きく依存した大学選びや知識詰め込み型の受験準備に偏った学習を助長したり，受験準備教育の低年齢化などを招いたりしている場合も少なくない。このため，過度の受験競争は解消されていないとの社会一般の受け止めが存在することも事実である。進学にかかわって，生徒・保護者さらには学校が多様な評価軸をもつことの難しさを示すものと言えよう。

このように，大学進学をめぐることは，大学の入学者受け入れ枠の実質的な大幅拡大と選抜方法の多様化が同時に起こる中，大学選びの在り方や目的意識等の多様化が進むとともに，受験競争に対する態度や受け止めについても相反する方向性が共存するなど，事態は

5) ...P65 資料7「国公立大学推薦入学実施状況」参照

混沌としている。

また、専修学校専門課程（専門学校）への進学については、一時のような急速な伸びはなくなったものの、厳しい雇用情勢の下での実学志向の高まりなどを反映して進学率は10パーセント台後半を維持している（図3）。専門学校は教育分野、履修形態及び入学者の入学動機も極めて多様であることから、入学者の実態についての全容をつかむことは難しいが、実質的に開放入学制をとっていることなどから、教育分野等によっては、明確な目的意識を持たず、



無目的に入学してくる者の数も少なくないと考えられる。

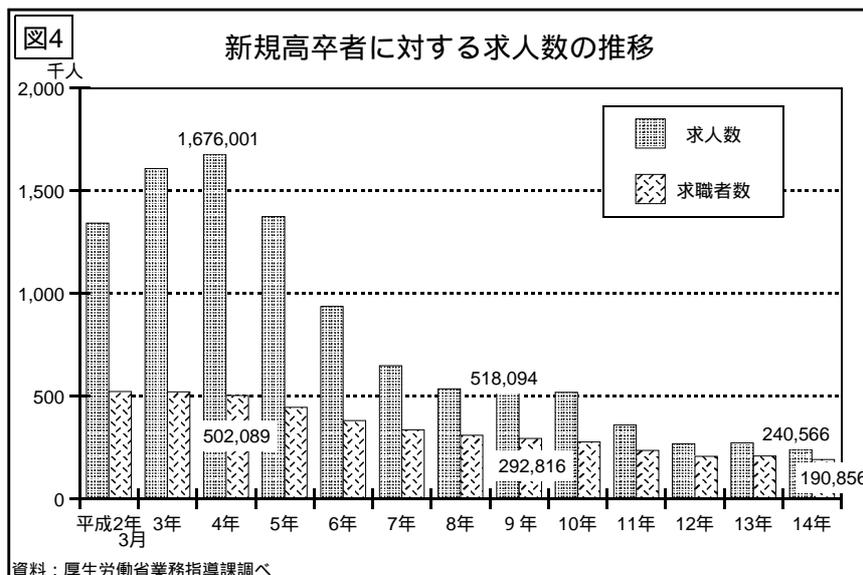
しかし、その一方、近年、大学に進学するよりは、実践的・専門的な技術や資格を身に

付けることを目指し、専門学校に進学する者が増加していることも報告されている。また、大学に在籍しながら、専門学校で学ぶいわゆるダブルスクールの学生をはじめ、大学卒業後、新たに専門学校で学ぶ者も相当の数に上っている。専門学校入学者の進路意識・目的意識の2極化が進行していると考えられる⁶⁾。

(2) 就職をめぐる状況

高等学校卒業時に就職する者の割合は急激に低下している。高等学校卒業生数がピークを迎えたのは平成4年3月である。この年33.1%であった就職率は、10年後の平成14年3月には17.1%にまで下降し、就職者の実数では、平成4年3月の就職者58.4万人に対し、平成14年3月には21.8万人と4割以下に減少している（文部科学省児童生徒課調べ）。また、求人数についても、同様に167.6万人から、平成14年3月には24.1万人にまで激減するとともに（図4）、職種・企業規模等の面での変化も大きく、生徒の希望と乖離してい

6) ...P66～P67 資料8～11「専門学校の分野別生徒数の推移」等参照



くという事態が進行している⁷⁾。

新規高卒者の就職をめぐるこのような厳しい状況の背景には、長引く不況という景気要因があることはもちろんであるが、経済・産業や雇用及び労働市場等の構造的変化という

大きな要因がある。企業は低コスト化や高い付加価値を目指して、生産拠点の海外移転、製造部品の海外調達、製品の差別化や多種・少量生産、情報通信関連等の産業分野への転換などを進めるとともに、経営の合理化・効率化を図るため、いわゆるリストラや雇用調整を行っている。これに伴い、雇用の吸収力は、これまでの経済の発展・成長をリードしてきた重厚長大型の産業分野から、情報・通信関連分野やサービス産業などへと移りつつある。

このような動きに呼応して、企業の求人ニーズや雇用・採用形態も大きく変化している。業務の高度化に伴ってスペシャリスト、即戦力を求める傾向が強まり、採用が大学等上級学校卒業者へシフトするとともに経験者採用、職種別採用、中途採用、さらには、アウトソーシングによる人材の調達・確保等が増え、新規学卒者一括採用の比重が低下してきている。一方、多くの定型的業務については、人件費節約のため正規職員の非正規職員（パート・アルバイトなど）への代替や臨時的、一時的雇用への切り替えが進み、伝統的な高卒者の職場が縮小している。

こうした事情に加え、職業・職種に対する理解や認識、働くことに対する意欲や態度、我慢強さや責任感を含め職業人・社会人として自覚や社会的成熟に対する企業等の不満やマイナス評価が重なり、新規高卒者の就職を困難にしていると考えられる⁸⁾。

7) ...P68 資料12・13「新規高卒者の企業規模別就職先構成比の推移」・「新規高卒者の職業別就職状況の推移」参照

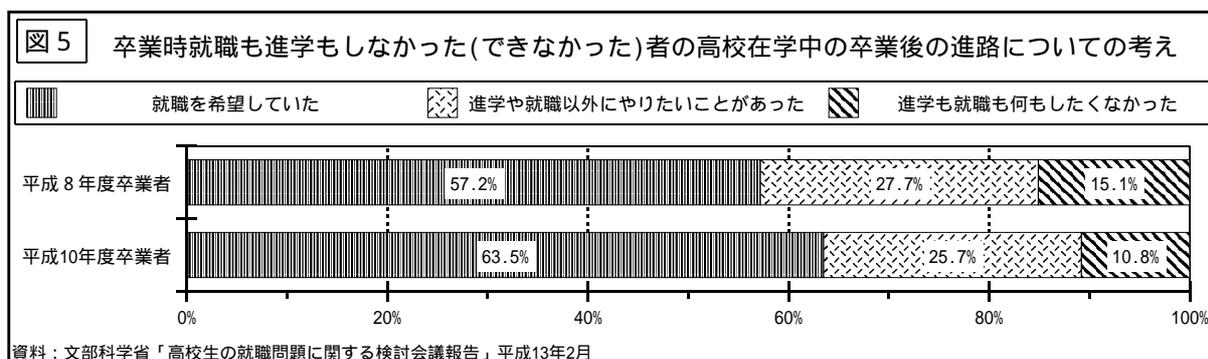
8) ...P69 資料14「高卒者を採用していた企業が採用を中止した理由」、資料15「新規高等学校卒業生就職内定状況」参照

(3) 就職も進学もしない者をめぐる状況

学校基本調査で高等学校卒業後の状況を見ると、平成14年3月の高卒者131.5万人の内、進学者にも就職者にも属さない「左記以外の者」（平成10年度までは「無業者」と表記）に分類される者は、卒業生全体の10.5%（13.8万人）に達し、平成4年3月卒業者の4.7%（8.5万人）以降、著しい増加傾向を示している⁹⁾。ちなみに、「左記以外の者」には、家事手伝いをしている者や、外国の高等学校等に入学した者が含まれるが、その多くは、就職も進学もしない（できない）でアルバイトやパート業務に従事する者、いわゆるフリーターであると考えられる。

その中には、就職活動を行ったにもかかわらず就職に至らなかった「就職未決定者」も含まれている。この就職未決定者については、平成4年3月卒業者以降、増加傾向にあるが、卒業生全体に占める割合で見れば、0.7～2.6%台での推移（平成4年3月：12,193人、平成14年3月：34,521人（文部科学省児童生徒課調べ））であり、「左記以外の者」の急上昇は、これ以外の者、つまり就職活動を行わなかった者の増加によるということになる。

また、高校卒業時に就職も進学もしなかった者が、在学中、卒業後の進路をどのように考えていたかについては、文部科学省「高校生の就職問題に関する検討会議報告」によれば、「就職を希望していた」生徒が多く、「進学や就職以外にやりたいことがあった」、「進学も就職もしたくなかった」とする生徒を大きく上回っている（図5）。

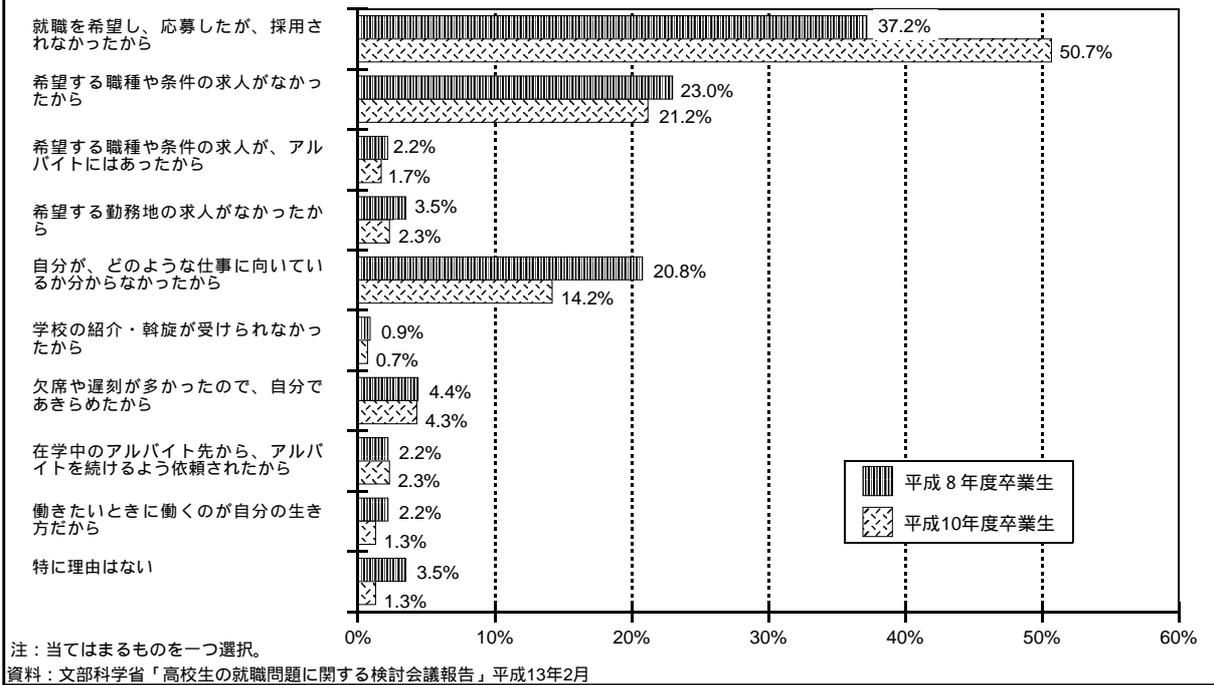


つまり、最初から就職も進学もするつもりのない生徒はある程度存在するが、むしろ、多数を占めるのは、就職希望をもっているにもかかわらず、希望する職業・職種等の求人がないことなどから、就職活動を行う前に、早々と就職をあきらめている生徒達だということである。このことは、就職しなかった理由によっても裏付けられる（図6）。

9) ...P70 資料16「無業者率と有効求人倍率の推移」参照

図 6

就職しなかった理由



2 生活体験・社会体験等の機会の喪失

現在、多くの子どもたちは豊かな消費文化を享受しながら、都市化の進んだ地域社会、少子化の進んだ核家族の中で育ってきている。そのため、家庭においては、ごく限られた人間関係や役割分担しか経験できず、地域社会においては、日常的に仲間と切磋琢磨したり異なる世代の他者と交流したりする機会や、学ぶことや働くことの大切さを自然に体得できるような場が得られにくくなるという状況が広がっている。

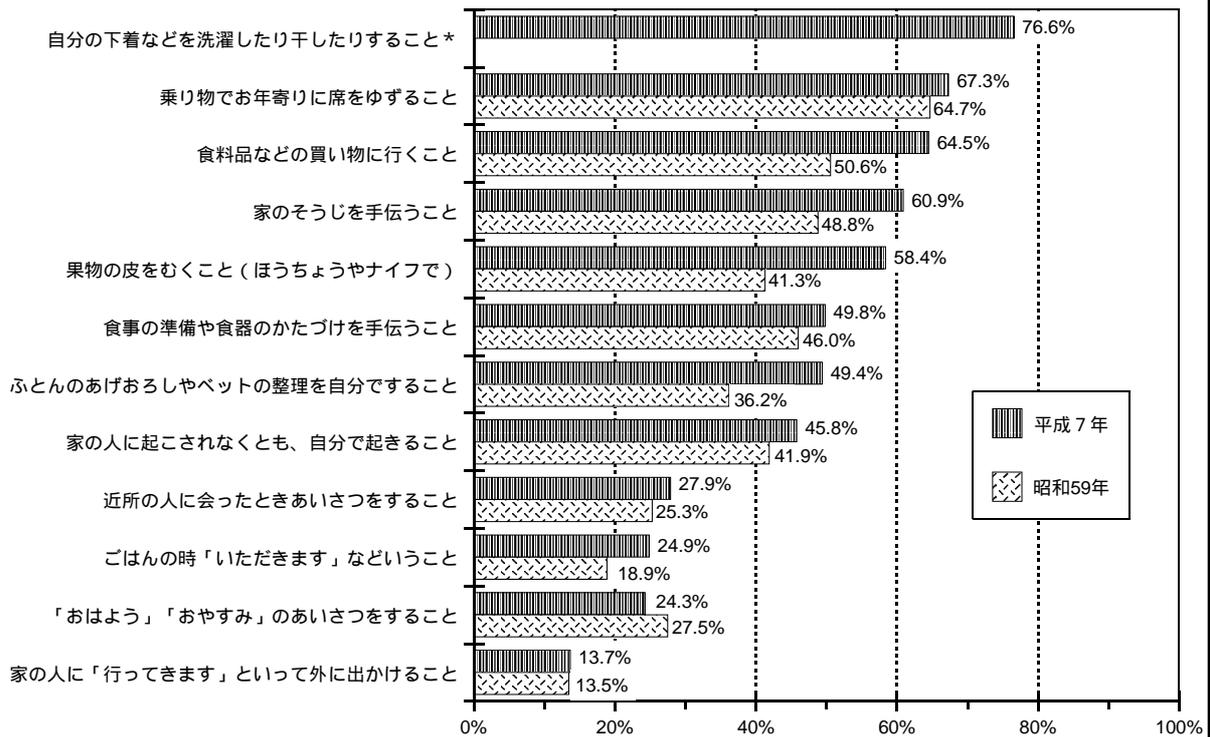
子どもたちが、人間として成長を遂げていくためには、様々な生活体験・社会体験等を通して、発達課題を適時に達成し、それを累積していくことが大切であるが、このような生活環境等の激しい変化が、次第にそれを困難にし、子どもたちの成長・発達に関して、様々な負の影響をもたらしているのではないかと危惧されている（図7）¹⁰⁾。

第1に、職業観・勤労観の基盤の形成に関してである。今の子どもたちは、消費文化を享受することには早くから慣れているが、生産等の仕事が行われる場を見聞き体験する機会が少ない。このため、働くことの厳しさや喜びを実感し、その意味を学んだり、成就感

10) ...P70 資料17「あなたは、これまでに次のようなことをどのくらいしたことがありますか。」参照

図7

日常生活における様々な体験
- 「全然していない・しないときが多い」とした回答値 -

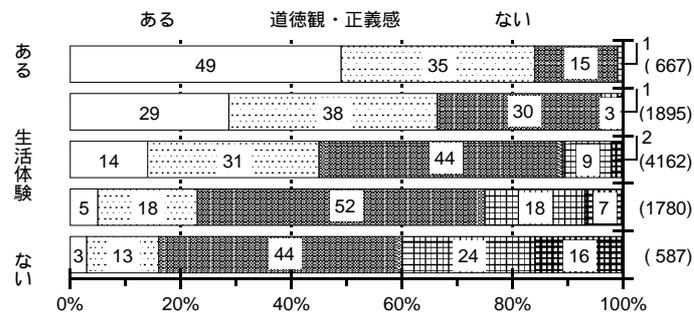


(注) 1都5県の小学4～6年生及び中学1・2年生、約2,000人を対象に調査。*は平成7年のみ調査項目。

資料：青少年教育活動研究会「子供たちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」平成7年

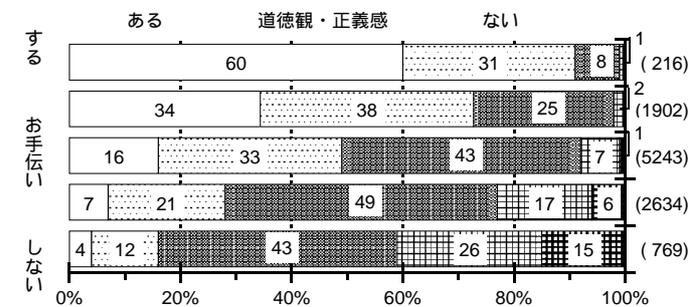
図8

生活体験と道徳観・正義感



注：生活体験・・・「小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと」「ナイフや包丁で果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」など

お手伝いと道徳観・正義感



注：「食器をそろえたり、片付けたりすること」「新聞や郵便物をとってくること」「ペットの世話とか植物に水やりをすること」

資料：文部省「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」平成10年度

や自己有用感を得たりする経験が乏しくなり、それが働くことや将来の職業に対する関心・意欲の低下を招いているのではないかとこのことである。

第2に、社会性の形成に関してである。子どもたちは、生活体験・社会体験を通して、集団の中の自己の位置や役割を自覚しながら、円滑な人間関係を築く力を養い、利害の対立やぶつかり合いを経験する中で、思いやりの心、我慢強さ、規範意識、さらには、社会の課題に前向きに挑戦する力などを

身に付けていく。しかし、体験の場が失われたことによって、こうした対人関係能力や社会に適應していく資質・能力等を十分培うことができなくなったのではないかとこのこと

である。この点に関し、生活体験・自然体験が豊富でお手伝いをよくする子どもほど、「道徳観・正義感」が身につけている傾向が見られることが報告されている（図8）。

第3に、子どもたちの学習に与える影響である。直接体験による感動や実感は、その後の学習へ強い動機付けとなるとともに、学校での学習によって得た抽象的な知識・理解を実生活と結びつけてより確実なものにし、更なる新しい認識の枠組みを獲得していくという重要な意味を持っている。このような意味を持つ直接体験が乏しくなっていることが、生きた学びの成立を困難にし、学んでも学んでもそれが身に付かず、自分を支える力となっていないという学習の歪みを引き起こしているのではないかということである。このことに関連して、国際数学・理科教育調査では、数学や理科が「好き」、「楽しい」とする生徒（中学2年生）や「理科は生活の中で大切」、「将来、科学を使う仕事がしたい」とする生徒の割合が、国際的に見て最低レベルにあることが報告されたが¹¹⁾、これについても、上記のような視点から、学習過程における体験や体験的学習の必要性が指摘されている。

生活体験、社会体験の機会の喪失が及ぼす影響については、こうしたこと以外にも、例えば、モノへの関心が高まる一方、人間（他者）への関心や愛着、信頼感を希薄化させたり、マスメディア等を通じて得られる間接情報や仮想の現実を現実だと錯覚して、自分の生活している世界がどんなところか実感できなくさせたりしているのではないかという指摘もなされている。

このように、生活環境の変化は、子どもたちの成長・発達に様々な影響を及ぼし、従来なら自然に達成されていた各時期の発達課題が十分達成されなくなり、そのことが、学ぶこと、働くことへの意欲・態度などの形成に大きな影を落としていると考えられるのである。

3 経済的な豊かさの実現と価値観の多様化

今日の経済的な「豊かさ」は、生活の安定や利便性の向上、モノやサービスの多様化、余暇時間の増加等をもたらすとともに、職業生活、社会生活、個人生活等、生活の全ての場面における選択の幅を拡大させ、人々は生きがいや生活の快適さ、暖かな心の交流などを求めて、自分なりのライフスタイルを選ぶことが可能になった。

11) ...P71 資料18「児童生徒の学力について」参照

これに伴って、人々の価値観も多様化し、職業選択の在り方も、かつて、多くの人々が共有した「貧しさを克服するため」、「安定した生活のため」といった経済的理由によるものから、自分なりの生きがいや働きがいを加味したものへ、主体性や創造性を発揮できるものへとその比重が移りつつある。また、職業・職種の多様化、融合化、専門化が著しく進展し、人々の前には、かつてない幅広い選択肢が用意され自己の可能性に挑戦する道が開かれてきている。

こうした変化が、望ましい変化であるとするにはおそらく論を待たないであろう。しかし、この変化は、同時に、一人一人が、自分はどのような生き方をするのか、何のために働くのかなどについて自分自身で探究し、自分なりの確固とした選択基準や選択する技術を身に付けなければならなくなったということを意味している。各人の人生観や職業観・勤労観の在り方が厳しく問われる時代を迎えたわけである。

こうした状況下での生き方の選択は、成人の場合でも決して易しいものではない。まして、青年期にある子どもたちは、「人生観・価値観の確立」という発達課題の達成に加え、「豊かさ」と「多様化」の中での選択基準・技術の獲得という新たな負荷を負うことになり、生き方を選択するための心理的圧迫や葛藤はかつての青年にはない強いものとなっていると考えられる。このことが、モラトリアム化やフリーター志向の一因となっている可能性があることにも十分留意しておく必要がある。

また、少子化や家庭の経済的ゆとりの増大、親の養育態度の変化等により、学校卒業後も親の保護の下での生活が容易になったことなどから、家族への経済的依存状況の長期化という現象が広がり、それが、上記のモラトリアム化やフリーター志向、あるいは安易な離転職を招く一因となって、学校から職業生活の移行に様々な課題を投げかけていることにも留意しておきたい。

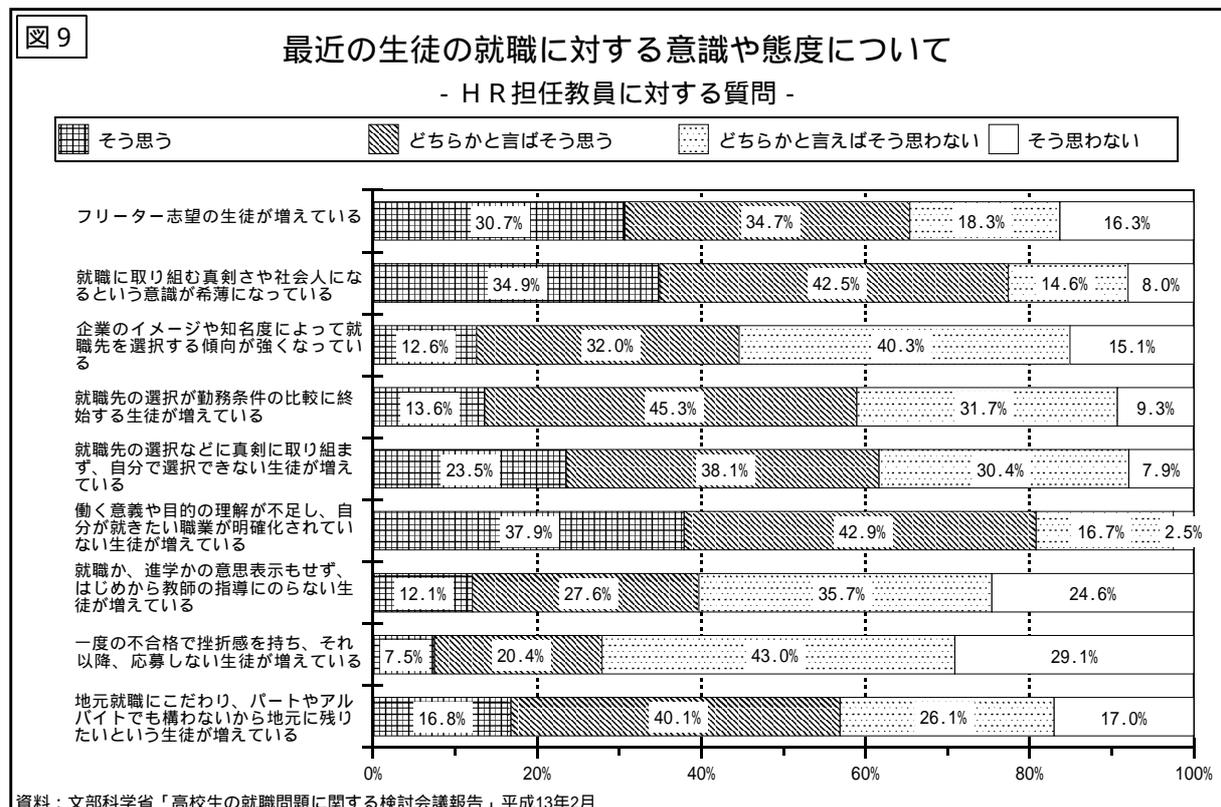
第2節 子どもたちの職業観・勤労観の現状とその育成をめぐる新たな状況

1 子どもたちの職業観・勤労観の現状

子どもたちの職業観・勤労観や進路意識の実態については、これまで様々な調査や論議が行われている。以下、その主なものを見ていきたい。

(1) 学校，企業へのアンケート等から

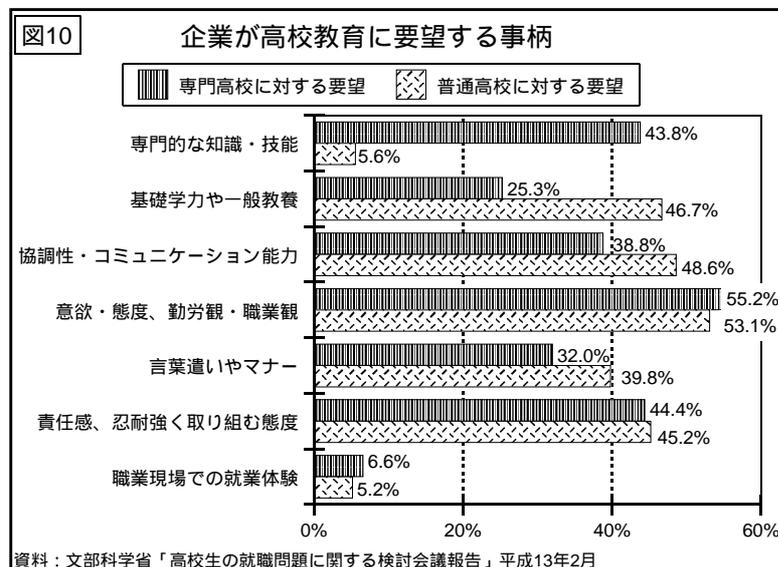
「高校生の就職問題に関する検討会議報告書」（平成13年2月）によれば、ホームルーム担任教員の8割余りが、最近の生徒の就職に対する意識や態度について、「働く意義や目的の理解が不足し、自分が就きたい職業が明確化されていない生徒が増えている」と思っており、「就職に取り組む真剣さや社会人になるという意識が希薄になっている」、「フリーター志望の生徒が増えている」とする割合もそれぞれ77%、65%に上っている（図9）。



また、同報告書では、最近の高校生の就業行動について、「自分の就きたい職業を見いだせない生徒や自分で志望する事業所等を選択できずに学校まかせ教師まかせにする生徒、さらには、自分の進路に対し希望を持っていない生徒が少なくないといった問題が顕在化している。一方、職種や企業、勤務条件などへのこだわりが強く、自分の希望が満たされなければ定職に就かなくてもよいとするという生徒や、一度の受験の失敗で就職をあ

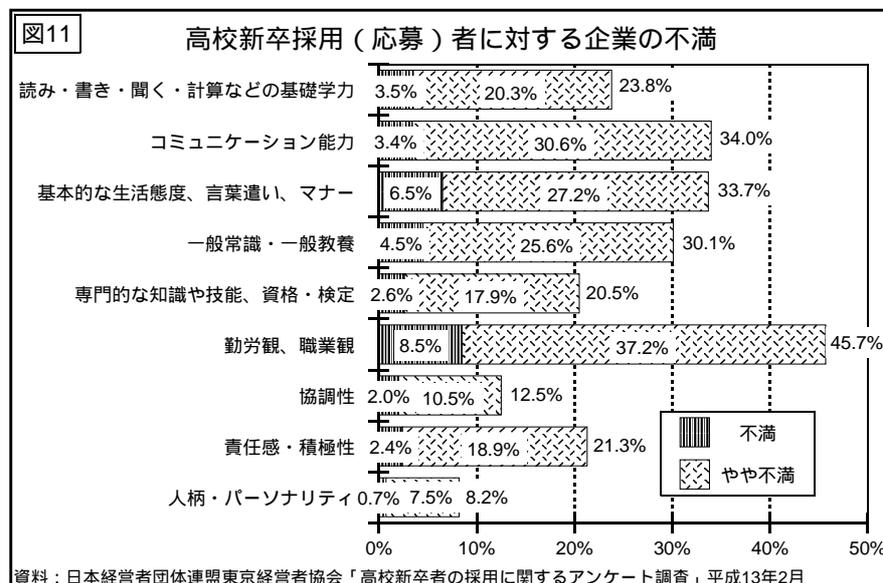
きらめてしまう生徒が少なくないといった状況も生じている。」と指摘している。

一方、企業の高校教育に対する要望については、第一に「意欲・態度、勤労観・職業観」があげられ、次いで、「責任感、忍耐強く取り組む態度」、「協調性・コミュニケーション能力」等が多くなっている（図10）。



企業に対する調査としては、このほか、高卒採用者に対する企業の満足度等について、「読み・書き・聞く・計算などの基礎学力」や「勤労観・職業観」等の9項目に分けて調査した「高校新卒者の採用に関する調査(平成13年2月)」(日本経営者団体連盟東京経営者協会)がある。

これによれば、不満・やや不満とする割合は、「職業観・勤労観」が最も高く、「コミュニケーション能力」、「基本的な生活態度、言葉づかい、マナー」がこれに次いでいる（図11）。



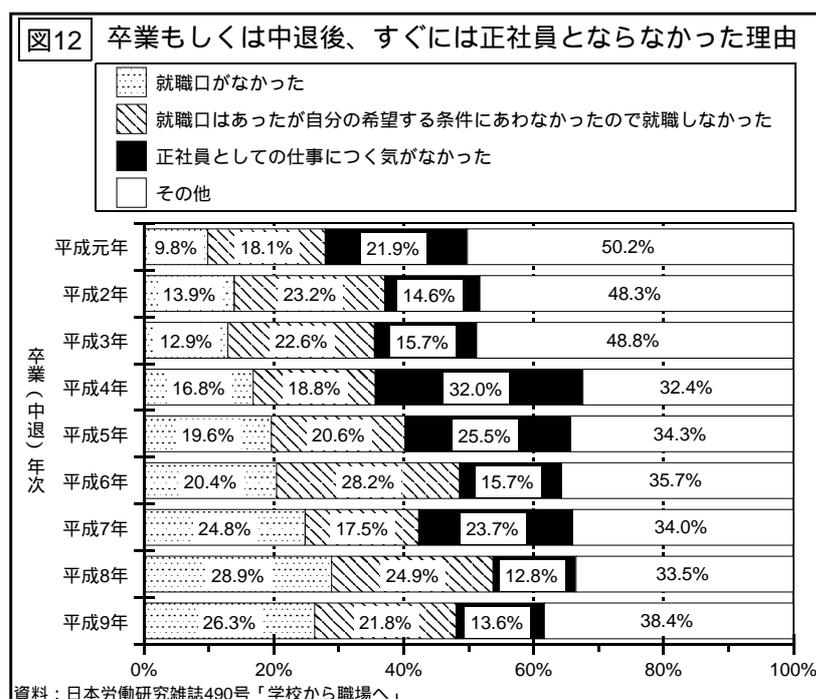
これら二つの結果を併せると、企業は採用に当たって、社会人・職業人としての基本的な資質・能力、職業観・勤労観を重視しているにもかかわらず、その満足度は極めて低いという実態が見えてく

るわけで、働くことへの意欲や態度、職業観・勤労観の未成熟などといった昨今の指摘を裏付けるものとなっている。

(2) 子どもたち自身へのアンケート結果等から

一方、若者の職業観・勤労観、特に、就業への意欲は明確に低下しているとは言えない

とする指摘もある。厚生労働省の「若年者就業実態調査」に基づいて復元構成された「卒業もしくは中退後、すぐには正社員とならなかった理由」によれば、「就職口がなかった」とする割合は大きく増加しているが、「正社員としての仕事に就く気がなかった」割合には増加傾向は見られず、また、「希望する条件に合わなかったので就職しなかった」割合も、大きく増加する傾向は見られない。フリーター志向や離転職等の動きなどについても、新規学卒者の労働市場の著しい悪化が若者に魅力ある仕事や職場を提供できなくなったこ



とが要因であるのに、それを職業意識の低下であると錯誤していると指摘している(図12)。また、既に見たとおり、就職も進学もせずに高等学校を卒業していく者の多くが、就職を希望していたというデータもある(図5)。

ア 職業に求めるもの

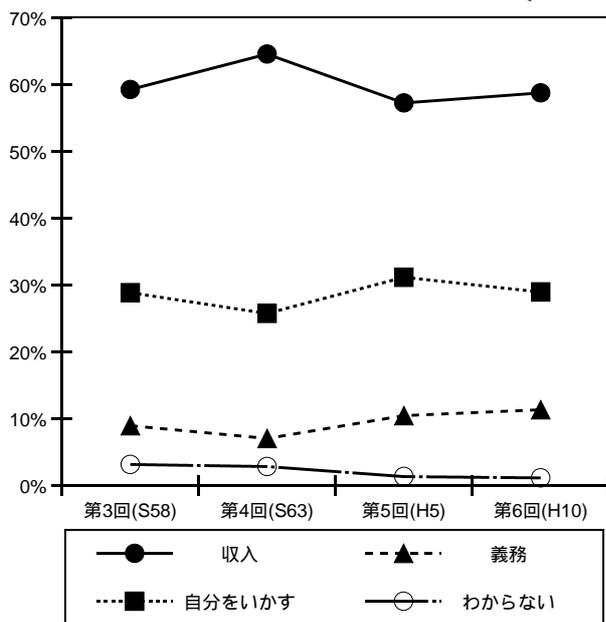
5年に1度実施される「世界青年意識調査」では、「人が働くのはどのような目的だと思うか」について調査している。これによると、「収入を得ること」(約6割)が最も高く、「仕事を通じて自分を生かすこと」(約3割)、「社会人としての義務を果たすこと」(約1割)となっており、それぞれの割合は、他国ではその時々に対応変化しているにもかかわらず、我が国では過去20年間大きく変化することなく推移している(図13)¹²⁾。

この結果を見る限り、我が国の若者の意識は、むしろ変化していないことに特色がある。国民性の違いによるところも大きいと考えられるが、これだけ激しく社会が変化しているにもかかわらず、我が国の回答状況だけが変わらないのはなぜかという疑問が残ることも確かである。この点について、例えば、子どもたちが職業生活や職業の世界の現実をどれほどつかんでいるか、働くことを自己の生き方の問題として考えているかという問題意識

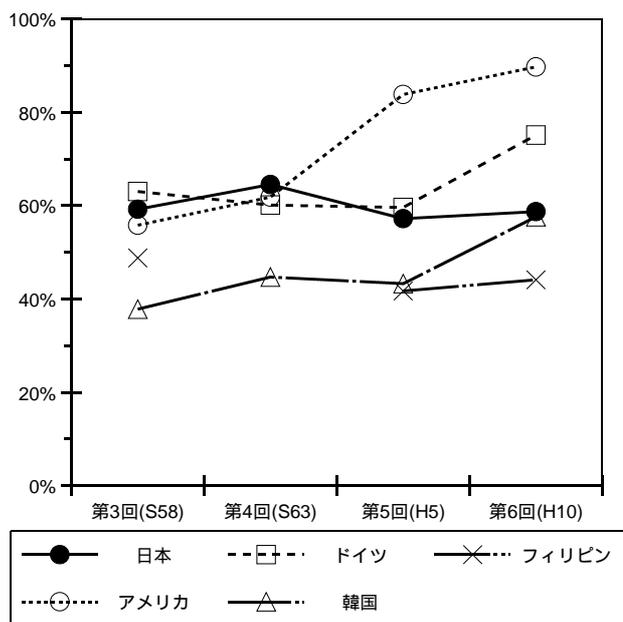
12)...P72 資料19「働く目的」参照

図13

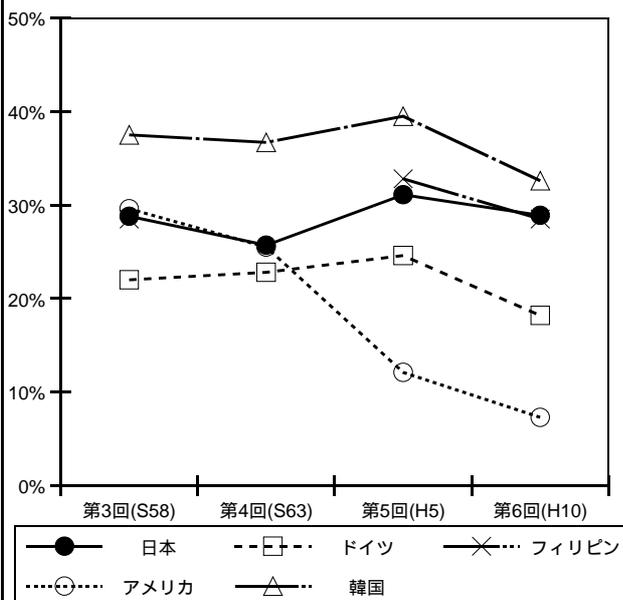
人が働くのはどんな目的だと思うか（日本）



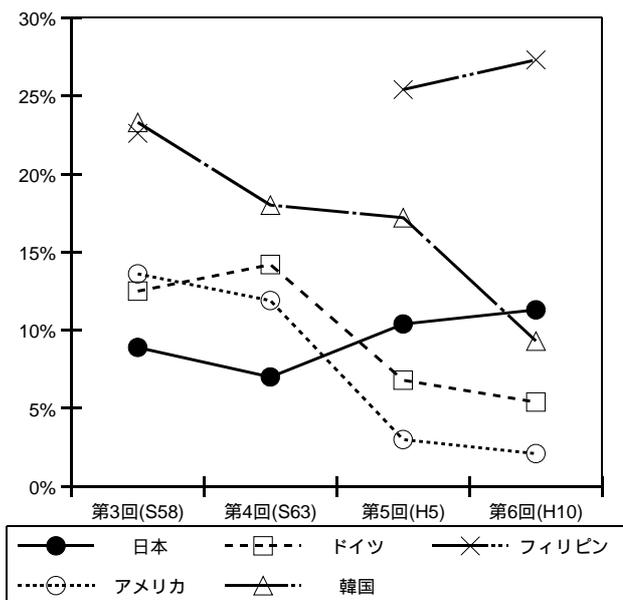
収入を得ること



仕事を通じて自分をいかすこと



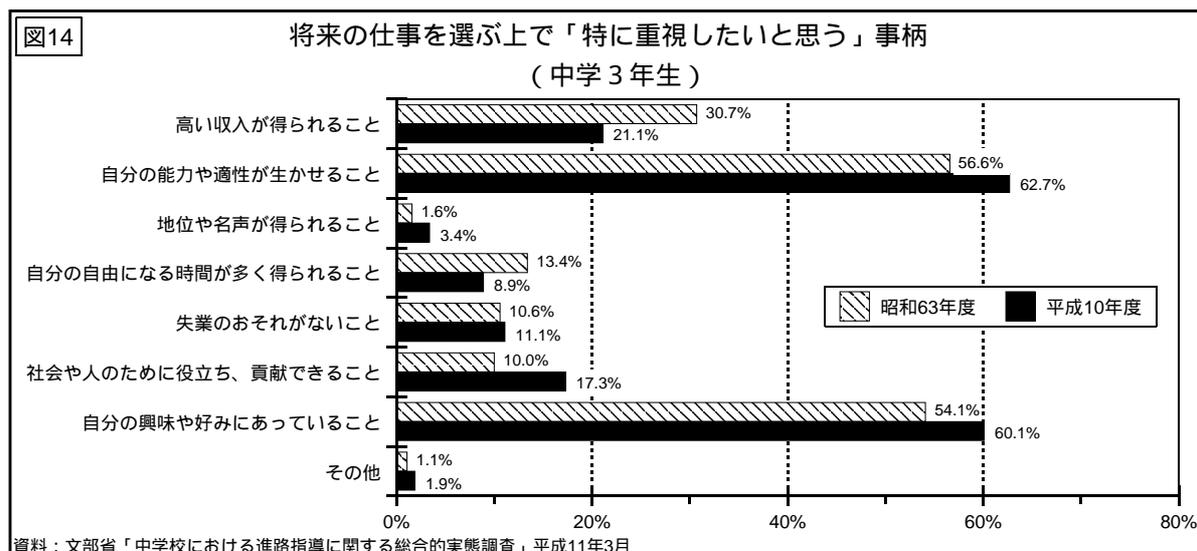
社会人としての義務を果たすこと



資料：総務庁「世界青年意識調査報告書（第6回）」平成10年12月

をもってこの結果を受け止めるとともに、家庭、学校、地域において、そうした場や機会、情報の提供などが十分行われてきたかどうかを改めて検討することも必要であろう。旧文部省の「中学校における進路指導に関する総合的実態調査（平成11年3月）」では、生徒自身の「将来の仕事を選ぶ上で特に重視したいと思う事柄」について調査している。これを見ると、前回調査時も高かった「自分の能力適性が生かせること」、「自分の興味や好みにあっていること」が、前回に比べいずれも6ポイント程度上昇し約6割となっている。また、割合こそそう高くないが、「社会や人のために役立ち、貢献できること」が17.3%

と7ポイント余り増加している（図14）。



職業・職種を選択する上で、自己の能力・適性、興味や好みを重視する傾向があることについては、企業関係者からも、近年の新入社員には、やりたい仕事や「職」へのこだわりが強くなってきていることが指摘され、また、会社選択の理由についても、「自分の能力・個性が生かせるから」、「技術が覚えられるから」、「仕事がおもしろいから」などが増加していることが報告されており、上記の動きと符合するものであろう¹³⁾。

イ 職業についての意識等

日本労働研究機構が実施した「中学生、高校生の職業認知」の実態に関する研究では、140余りの職業名をあげ、それぞれについて、中高生が「イメージできない」、「知りたい」、「やってみたい」かどうかを「はい - いいえ」で回答した結果をランキング表に示している。このうち「やってみたい」とする職業を見ると、男女差は存在するものの、マスメディアを通じて目にする職業が多いという点では共通しており、特に、「コンピュータ」関連や「ファッション」関連のカタカナ表記による職業名が多くあげられている。「警察官」や「美容師」、「幼稚園教員」のように、子どもたちが身近に接したり、従来から一貫して憧れとなったりしている職業も見られるが、全体として、この結果は、中高生の職業情報を得ていくルートにおいて、いかにマスメディアの影響が大きいかを端的に示している（図15）。

また、高校2年生の将来の職業生活への意識等に関する調査では、大半の生徒は将来の目標とする職業は持っているが、その割には、自己の能力・適性を理解している者や希望

13) ...P72 資料20「会社の選択理由」参照

図15

「やってみたい」ランキング上位30位

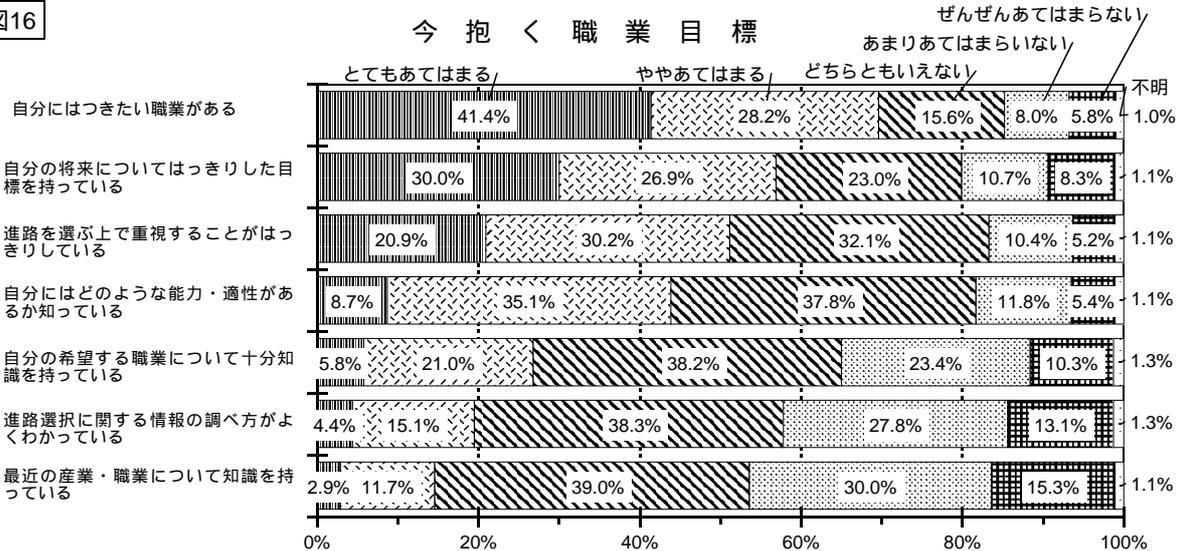
(中学男子)			(中学女子)		
順位	職業名	%	順位	職業名	%
1	ゲームクリエイター	31.81	1	美容師	48.57
2	花火師	29.83	2	洋菓子職人	44.57
3	スポーツ用品販売員	27.74	3	ファッション商品販売員	40.83
4	宇宙飛行士	26.97	4	ペットショップ店員	37.63
5	コンピュータ設計技術者	26.70	5	幼稚園教員	37.28
6	探検家	25.00	6	水族館飼育スタッフ	36.98
7	警察官	24.17	7	スタイリスト	36.39
8	発明家	23.03	8	遊園地スタッフ	34.86
9	ソフトウェア開発技術者	21.63	9	ベビシッター	34.77
10	すし職人	21.05	10	動物園飼育スタッフ	34.29
11	コンビニ店長	20.87	11	フラワーショップ店員	34.05
12	ゲームセンター店員	20.17	11	芸能マネージャー	34.05
13	芸能マネージャー	19.85	13	ファッションデザイナー	32.97
14	プログラマー	19.74	14	声優	31.43
15	コック	19.59	15	インテリアコーディネーター	31.18
15	グラフィックデザイナー	19.59	16	保育士	31.07
17	建築技術者	19.03	17	和菓子職人	30.82
18	プロ野球選手	18.75	18	ウェ이터・ウェイトレス	30.57
19	パソコン組立・調整工	18.58	18	スチュワーデス・スチュワード	30.57
20	ミュージシャン	18.42	18	アナウンサー	30.57
21	テレビカメラマン	18.32	18	雑誌記者	30.57
22	船長・航海士	18.18	22	ミュージシャン	30.00
23	自動車設計技師	18.07	23	メーキャップアーティスト	29.88
24	書店店員	17.81	24	インテリアデザイナー	29.14
25	自動車組立工	17.76	25	看護婦・看護士	28.86
26	洋菓子職人	17.43	26	獣医師	28.29
26	漫画家	17.43	27	美容部員	28.00
28	電気・電子技術者	17.33	28	レジ係	26.16
29	声優	17.11	29	書店店員	25.81
30	建築大工	17.05	30	カラーコーディネーター	24.85

(高校男子)			(高校女子)		
順位	職業名	%	順位	職業名	%
1	ゲームクリエイター	25.50	1	洋菓子職人	36.26
2	探検家	22.01	2	美容師	33.43
3	コンピュータ設計技術者	21.79	3	幼稚園教員	31.50
4	ソフトウェア開発技術者	21.25	4	遊園地スタッフ	30.31
5	宇宙飛行士	19.91	5	ファッション商品販売員	28.97
6	自動車設計技師	18.12	6	ペットショップ店員	28.32
7	プログラマー	17.93	7	心理学者	28.04
8	グラフィックデザイナー	17.00	8	フラワーショップ店員	27.75
9	エンジン設計技術者	16.67	9	インテリアデザイナー	27.20
9	花火師	16.67	9	動物園飼育スタッフ	27.20
11	ミュージシャン	16.55	11	水族館飼育スタッフ	26.79
12	心理学者	16.24	12	メーキャップアーティスト	26.48
13	自動車組立工	16.09	13	スタイリスト	26.17
14	私立探偵	16.03	14	雑誌記者	26.06
15	警察官	15.88	15	和菓子職人	25.72
16	発明家	15.86	15	インテリアコーディネーター	25.72
17	自動車整備工	15.40	17	書店店員	25.43
18	麻薬取締官	15.38	18	ベビシッター	25.14
19	建築技術者	15.17	19	カラーコーディネーター	23.99
20	ソムリエ	14.99	20	スチュワーデス・スチュワード	23.51
21	刀匠	14.77	21	ホテルフロント係	23.12
22	バーテンダー	14.71	22	保育士	23.05
23	電気・電子技術者	14.53	23	ファッションデザイナー	22.54
24	雑誌記者	14.48	24	百貨店販売員	22.25
25	システムエンジニア	14.32	25	美容部員	21.81
26	ワイン製造工	14.02	25	ミュージシャン	21.81
27	俳優	13.89	27	秘書	21.53
28	スポーツインストラクター	13.87	28	ペーカリーショップ店員	21.18
29	芸能マネージャー	13.87	29	グラフィックデザイナー	20.52
30	考古学者	13.79	30	犬訓練士	20.23

資料：日本労働研究機構 資料シリーズ2001 NO.112「中学生・高校生の職業認知」

図16

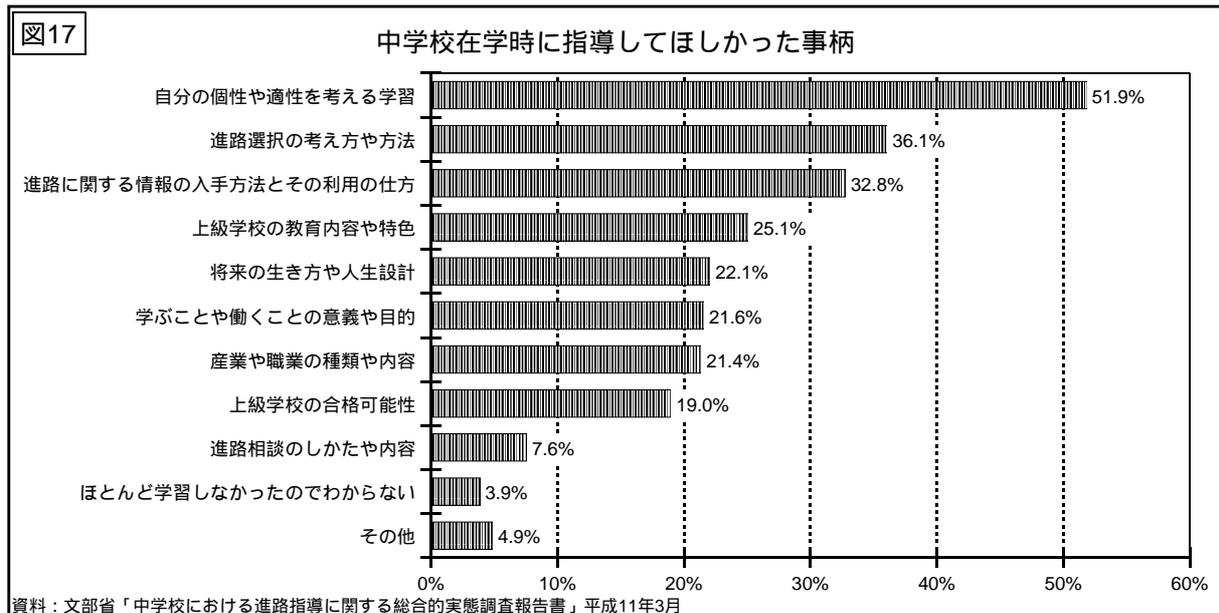
今抱く職業目標



資料：ベネッセ教育総研 モノグラフ・高校生VOL.57「大学受験の「現在」」平成11年度

する職業についての知識や情報を持つ者は少なく、職業選択に関する情報の調べ方を知っている者、最近の産業・職業についての知識を持つ者はさらに少ないという状況が示されている（図16）。

このほか、自己の適性及び職業に関する知識・理解にかかわる実情については、中学校卒業者が、学校の進路指導において「在校時に指導して欲しかった事柄」の第1に「自分の個性や適性を考える学習」をあげている（「中学校における進路指導に関する総合的実態調査」）（図17）。また、高等学校卒業者は「進路指導への要望」の第1に「自分が何に



向いているかを知るための学習」を、また、就職者、未就職者がともに、「高校時代にもっとやっておけばよかったと思う事柄」として、「自分がやりたい職業、自分に向いている職業を見つける」を第1にあげている（「高校生の就職問題に関する検討会議」）（図18、図19）。このように、自己の適性及び職業に関する知識・理解は、子どもたち自身がその不十分さを強く感じている課題でもある。

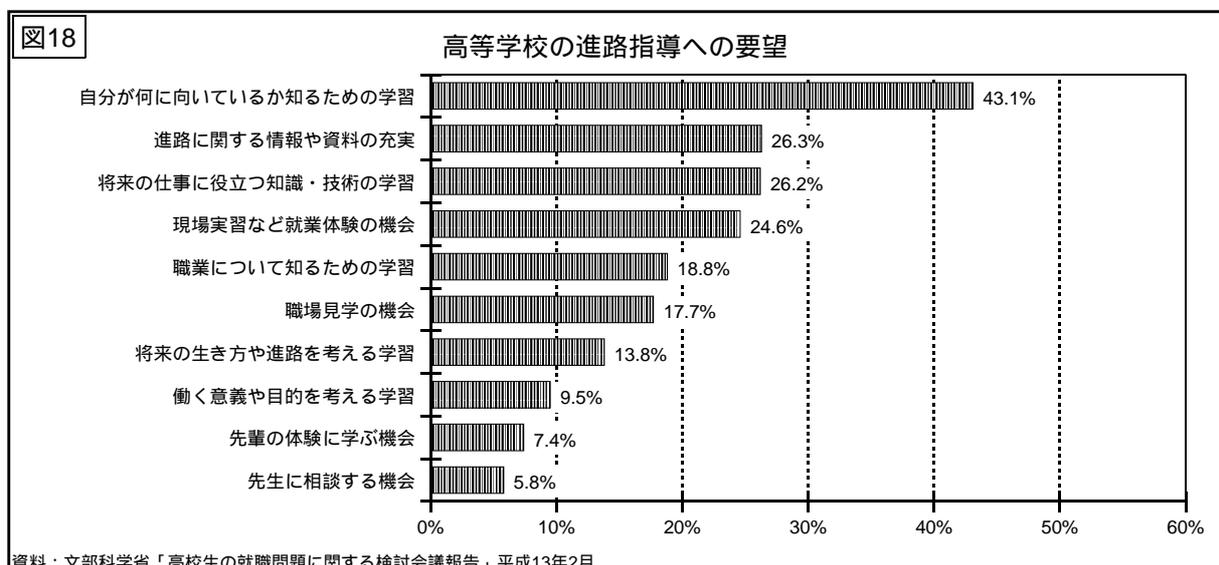
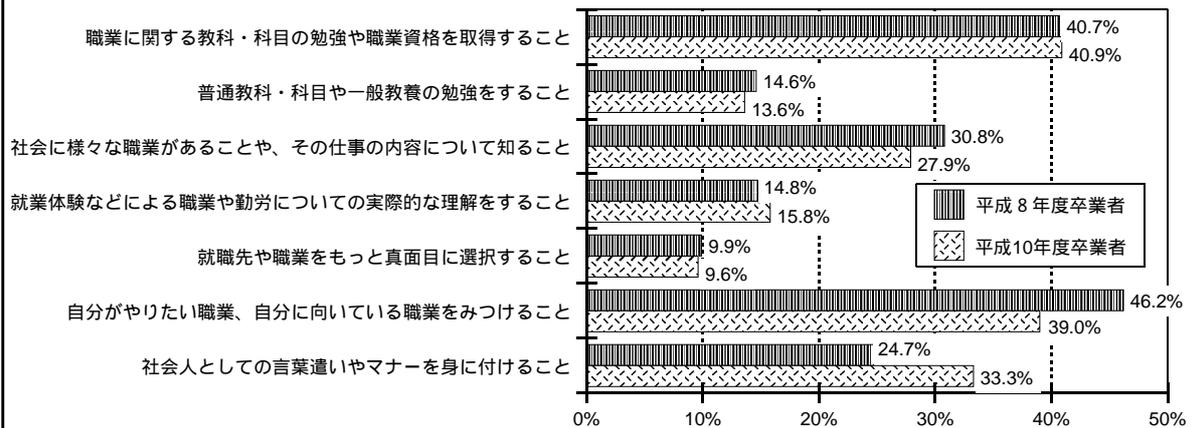
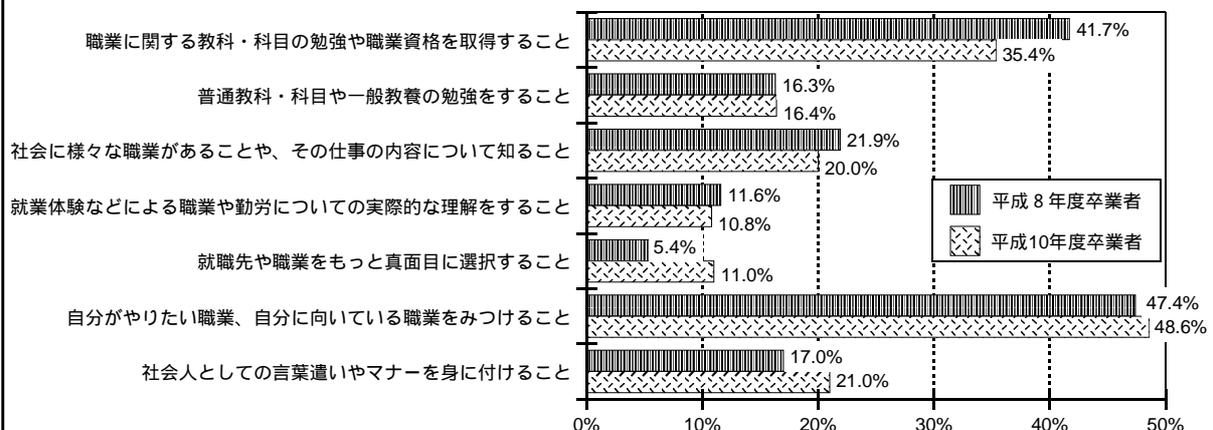


図19

就職者が高校時代にもっとやっておけばよかったと思う事柄



未就職卒業者が高校時代にもっとやっておけばよかったと思う事柄



資料：文部科学省「高校生の就職問題に関する検討会議報告」平成13年2月

これら各種の調査結果等から見てくるのは、情報化等が進む激しい時代の変化の中で、子どもたちは、自己実現や「やりたいこと」、職業・職種等へのこだわりを強めてはいるものの、自己の能力・適性及び職業の実際などについて不十分にしか把握できない状況に置かれている実態であろう。そのことが、社会全体の不透明さや閉塞感の増幅と相まって、自己の生き方と将来の職業とを関連づけて考えることを難しくしたり、将来のイメージを描きにくくしたりしていることは想像に難くない。子どもたちの職業観・勤労観に対する、大人社会からのマイナス評価が大勢を占めるのも、このような実態がその背景にあるからではないかと考えられる。

2 職業観・勤労観の育成が不可欠な「時代」

若者の職業観・勤労観の未成熟等については、過去から様々に指摘されてきた古くて新しい課題である。しかし、今日の状況は、過去とはその様相を一変している。経済が継続的に成長を続け、労働力の確保が優先された時代には、企業から職業観・勤労観が大きく

問題にされることは少なかった。「貧しさを克服するため」、「安定した生活のため」に職を求める多くの若者には、有り余る求人が用意され、何らかの職業に就くことが可能であった。企業は、職業上必要な知識・技術は入社後の教育訓練で習得させることを前提に、学卒者の採用について、潜在的能力や性格・意欲、勤勉さ、学歴、学業成績などを重視し、これに呼応して、多くの生徒・学生は学業その他の活動に励んできた。また、社会には子どもたちが自然に職業や勤労にかかわる様々な体験等を得る場があった。そうした時代背景の中で、学校において、職業観・勤労観の育成に多くの力を注がなくても、学校から職業生活への移行が概ね円滑に行われていたのである。

しかし、そうした状況は確実に変わりつつある。企業等の求める人材については、意欲や態度、勤労観・職業観、責任感、忍耐強く取り組む態度等の基本的資質(図10)に加え、職業人として何ができるか、何に意欲を燃やすか、さらには高度な対人関係能力といった点が強調されている。また、終身雇用や年功型賃金の見直し等に象徴されるように、雇用の在り方も激しく揺れ動き、個人と企業との新たな関係づくりが様々に模索されている。加えて、若者の前には職業・職種に関する情報があふれ、「豊かさ」を背景に若者自身の生きがいや働きがいに対する志向は一層高まってきている。

このように多様性・流動性が増す社会は、自己実現の可能性やチャンスが広がると同時に、個人の生き方が厳しく問われる社会である。そうした社会で強く求められるのは、働くことへの意欲や進路を探索・選択していく力であり、その基盤となる職業観・勤労観である。その意味で、職業観・勤労観は、単に生き方や進路選択の基準としてだけでなく、自立した個人として他者と協働して生きていくため、全ての子どもたちが身に付けておかなければならない最低限の力ともいべき性格をもっている。また、その育成を図る取組は、社会や企業が求める人材を養成するといった役割を超えて、子どもたち自身のよって立つところ、生きる基盤を形成するという極めて重要な役割を担っている。

一人一人が自分なりの職業観・勤労観を持つことが不可欠な時代を迎え、子どもの頃から、職業観・勤労観やその基盤を育てていくことが極めて重要になっている。しかし、同時に、かつてなく職業観・勤労観を育てることが難しい状況があることも事実である。このことを十分理解し、子どもたちの職業観・勤労観をめぐる課題を、決して、子どもたち自身の責任のみに帰すべきものとして捉えるのではなく、時代の変化がもたらす根深い課題として捉え、家庭、学校、地域の連携を深め、大人社会が一体となってその育成に取り組むことが求められる。

第2章 職業観・勤労観を育む教育の意義

第1節 職業観・勤労観の定義

1 職業観・勤労観とは何か

「職業観」は、人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識である。「職業観」は、人が職業そして職業を通じての生き方を選択するに当たっての基準となり、また、選択した職業によりよく適応するための基盤ともなるべきものである（平成4年「文部省進路指導資料」）。ここでいう「価値的な理解」とは、世の中にはどんな職業があり、それぞれの職業ではどのような仕事をし、どんな専門的な資質・能力が必要なのかなどについての知識・理解をもとに、自分はどの職業にどんな働きがいや誇りをを見いだそうとするのか、あるいは、生きていく上で職業にどのような意味づけを与えていくかということである。

「勤労観」も同様に、勤労に対する価値的な理解・認識である。職業としての仕事や勤めだけでなく、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割遂行などを含む、働くことそのものに対する個人の見方や考え方、価値観であり、個人が働くこととどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準となるものである。

「職業観」、「勤労観」を含め、一般に、「観」は、外界とのかかわりを通して個人の内面に形成されるものであって、対象とする事柄（この場合は職業や勤労）を、自己に引きつけ自分自身の問題として考えるところに成立するとされる。このため、思索することによって形成される見方・考え方として、静的で固定的・不変的なものと捉えられがちであるが、その見方や考え方は外界とのかかわり方や姿勢・態度を含んでおり、外界とかわる力さらには自己を変革していく能動性を持っている。

例えば、職業にかかわる新たな発見や人との出会いなどを通して、その都度、「職業観」も変容していく。そこには、その出会いを意味あるものとして受け止める土壌としての「職業観」があり、その土壌としての「職業観」が、発見や出会いを受けて自らを変容させ、その後の外界へのかかわり方を変えていくという一連の過程が存在するのである。

「職業観」と「勤労観」は、「働くこと」を共通項としてつながっている。勤労体験を通して職業生活や職業を通して生きることに理解が深まり、逆に個々の職業を体験することを通して勤労の意義についての理解が深まっていくというように、互いに不即不離の関係にある。このため、通常、「職業観・勤労観」として一体的に取り扱われる場合

が多い。ただ、その場合においても、「職業観」には、様々な職業の世界及び職業倫理などについての理解や認識など、「勤労観」にはない独自の要素が含まれること、一方、「勤労観」では、「職業観」に比べて役割遂行への意欲や勤勉さ、責任感などといった情意面が重視されるなどの違いがあることを踏まえておきたい。学校において実際に体験活動等を展開するに当たっては、こうした相違に留意し、子どもたちの発達段階、学習活動のねらいに応じ、「職業観」、「勤労観」のいずれに重点をおくかを明確にして実施する必要がある場合も出てくると考えられるからである。

いずれにしても、「職業観・勤労観」は、職業や働くことを通してどのように生きていくのか、あるいは、労働と余暇、仕事と趣味などとの対比の中で、職業や勤労をどれほど重視していくか、人生や生活の目標の中にそれらをどう組み込んでいくかなど、個々人の「生き方」の選択決定及びその後の行動の在り方に極めて大きな影響を及ぼすものである。

以上の考察を踏まえ、「職業観・勤労観」を以下のようにまとめておきたい。

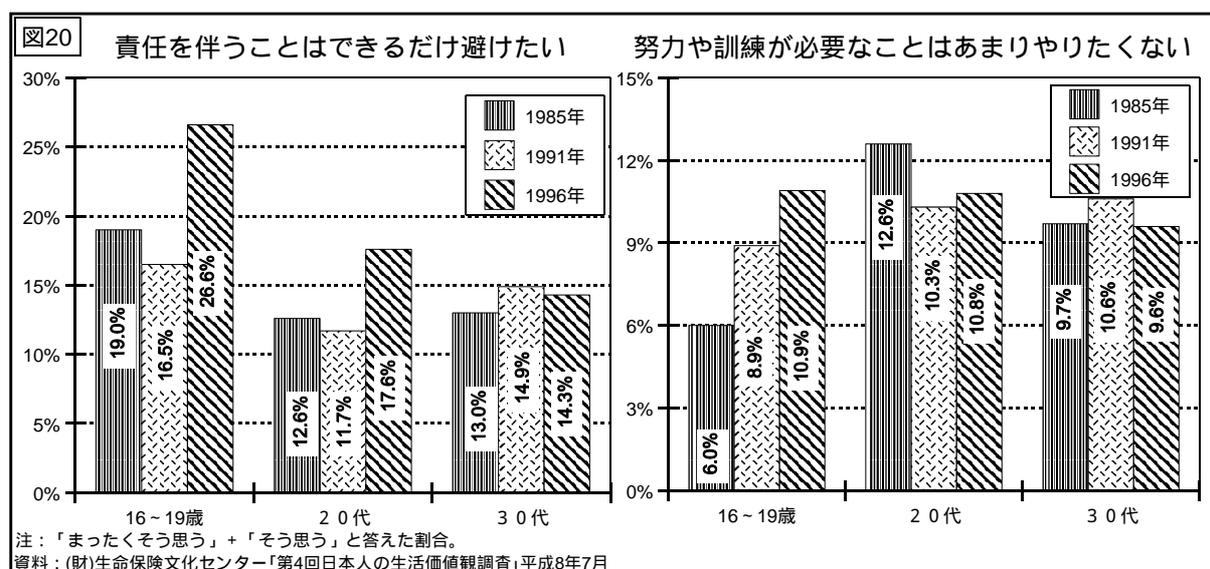
「職業観・勤労観」は、職業や勤労についての知識・理解及びそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり、職業・勤労に対する見方・考え方、態度等を内容とする価値観である。その意味で、職業・勤労を媒体とした人生観ともいふべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。

2 「望ましい職業観・勤労観」とは何か

職業観・勤労観の形成を支援していく上で重要なのは、正しいとされる一律の「職業観・勤労観」を教え込むことではなく、生徒一人一人が働く意義や目的を探究し、自分なりの職業観・勤労観を形成・確立していく過程への指導・援助をどのように行うかである。人はそれぞれ自己の置かれた状況を引き受けながら、何に重きをおいて生きていくかという自分の「生き方」と深くかかわって「職業観・勤労観」を形成していく。「生き方」が人によって様々であるように、「職業観・勤労観」も人によって様々であって然るべきだからである。

とはいえ、今日、社会が大きく変化する中で、最近の若者の「職業観・勤労観」に、ある種の危うさがあることを指摘する声は少なくない。例えば、安易な離転職、仕事に対する責任感の低下、あるいは、やりたいことに過剰にこだわったり、努力することを忌避し

て容易にあきらめたりすること，さらには，仕事は生活の手段に過ぎず，辛いもの，嫌なものという偏った見方しかできないこと等々である。また，責任を伴うことや努力や訓練を避ける傾向が強まっていること（図20），自己に対して否定的イメージを持つ者が増えていることなど，「職業観・勤労観」の形成にかかるマイナス要因も様々に指摘されている。このような行動や性向が，多くの若者に見られるものではないにしても，次第に増加する傾向にあることが憂慮されるのである。



既に見たように，こうした現象の背景には，生活環境や進路をめぐる環境の変化等が深くかかわっている。そこから見えてくるのは，職業の世界の実際を把握する機会を与えられず，自己の在り方を職業生活や社会生活とのトータルな関係の中で考えることができないままに，矮小化された現実認識を持ったり，将来への希望や自信，働くことへの意欲や関心を低下させたりしている若者の姿であろう。

職業観・勤労観の育成に当たっては，こうした状況を踏まえ，「自分なりの職業観・勤労観」という多様性を大切にしながらも，それらに共通する土台として，以下のような「望ましさ」を備えたものを目指すことが求められる。「望ましさ」の要件としては，基本的な理解・認識面では，

職業には貴賤がないこと

職務遂行には規範の遵守や責任が伴うこと

どのような職業であれ，職業には生計を維持するだけでなく，それを通して自己の能力・適性を発揮し，社会の一員としての役割を果たすという意義があることなどが上げられるであろうし，情意・態度面では，

一人一人が自己及びその個性をかけがえのない価値あるものであるとする自覚

自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通した，職業・勤労に対する
自分なりの構え

将来の夢や希望の実現を目指して取り組もうとする意欲的な態度
などがそれに当たると考えられる。

第2節 職業観・勤労観の育成に取り組むに当たっての基本的な考え方

今日の社会や生活環境の変化，それに伴う子どもたちの成長・発達や進路をめぐる環境の変化等を踏まえるとき，学校教育とりわけ進路指導の重要な課題は，達成への動機を高め，学ぶこと・働くことへの意欲や積極的な態度をどのように育てていくか，また，これと表裏一体をなし，生涯にわたる職業的（進路）発達の基盤となる職業観・勤労観の形成・確立の過程を，児童生徒の発達段階を踏まえながら，いかに系統的・計画的にかつ温かく，きめ細かく支援していくかということにある。

また，こうした取組を進める際には，「職業・勤労を媒体とした人生観とも言うべき」職業観・勤労観は，ある特定の資質・能力を高めることによってではなく，一人一人の全人的な発達によって形成されるものであること，同時に，それが全人的な発達を促すという重要な取組であることを認識し，学校の全ての教育活動を通して，また，全ての教員の共通認識と積極的なかかわりの中で行われるようにすることが大切である。

1 学ぶこと・働くことへの意欲を高める

(1) 分かる授業によって

第1章の高校生の進路状況の変化で見たとおり，大学等上級学校への進学が全体として容易になる中で，「大学に合格すること」が学習の目標や動機になりにくくなり，また，就職については，希望する会社・職種への就職がかつてなく難しくなる中で，希望する就職の実現という目標を失い，日頃の学習やその他の活動に対する意欲を低下させている生徒も少なくないと考えられる。「大学に合格するため」，「希望する就職を実現するため」という目標は，従来，学習その他の活動に取り組む生徒の意欲を高める上で有効に働いてきたことは確かであろう。しかし，現在，進路選択をめぐる環境が大きく変化する中で，進学，就職いずれの場合もそうした目標が成立しにくくなり，生徒を学習に向かわせる動機は大きく低下している。

また，こうした学習意欲・動機に関する課題は，高等学校に限らず，初等中等教育全般にかかわるものである。より多くの知識を効率的に教え込むことを優先し，画一的な知識詰め込み型の教育が行われがちであったこと，学校と社会，教育と職業，知識と労働との隔たりがますます大きくなっていることなどが，学ぶことの楽しさや意義を見つけたり理解したりすることを困難にし，学習への関心や意欲の低下をもたらしているのではないか

といった指摘は、既に早くからなされているところである。

学ぶことへの意欲や動機は、日頃の学習等において知的好奇心が喚起されるなどして、学ぶ楽しさや達成感などを味わうことを通して培われていく。したがって、それらを高めるためには、教科の学習を分かりやすくかつ知的好奇心に訴えるものにすることがまずもって大切である。そして、そうした教科の学習を通して生まれてくる興味や関心、知的好奇心が選択教科や総合的な学習の時間でのより深化・発展した学習につながり、それがひいては上級学校や将来の職業の選択のベースになっていくことが期待されるのである。教科の学習を分かりやすくかつ知的好奇心に訴えるものにすることと生徒の進路意識の高揚を図ることとは、本来、密接につながっていることを、改めて認識しておきたい。

(2) ガイダンスの機能の充実によって

一方、自分は何が好きなのか、どのように生きたいのかについて考え、自己の将来の夢や希望を描いていくことは、働くことへの関心・意欲を高めるだけでなく、学ぶことへの意欲や目的意識をより確かなものとし、真摯に取り組む態度を育てる上で決定的に重要な意味を持っている。そのため、子どもたちが、進路にかかわる調査や啓発的体験等を通し、職業や上級学校の実際についての理解・認識を深めながら、将来の進路や職業などへの希望を抱き、そうした将来の自己の姿から、なぜ学ばなければならないのか、今何を学ぶべきかを考え、理解できるようにすることが大切である。

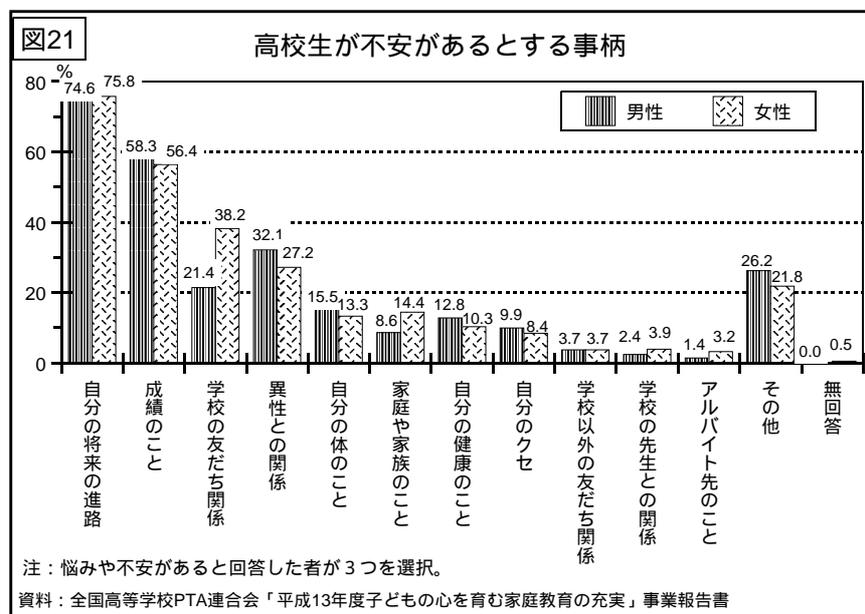
このことに関し、今回の学習指導要領の改訂において、総則及び特別活動において、「ガイダンスの機能の充実」が新たに盛り込まれ、また、特別活動の活動内容では、「学業生活の充実」と「将来の生き方と進路の適切な理解」が一体化されるとともに、「学ぶことの意義」が新たに例示項目として加えられている。

総則に示されたガイダンスの機能の充実は、学習活動など学校生活への適応、好ましい人間関係の形成、学業や進路等における選択、自己の生き方等にかかわって、適切な情報提供や案内・説明、活動体験、各種の援助・相談活動などを充実することを意図している。端的に言えば、適応と選択にかかる指導・援助の充実を図る点にある。また、こうした観点から、特に、特別活動において、学業生活の充実に関する指導と将来の生き方や進路の適切な選択決定に関する指導との関連づけを一層重視することとされたわけである。こうした趣旨を踏まえ、教科・科目の学習や選択を通して希望する進路を明確にしていく方向と、将来の自分やその生き方をしっかりと考えることによって、今、なぜ学ばなければならないのか、どのような学習が必要なのかを自覚していく方向との双方からの取組を

充実させ、子どもたちの内的動機を高め、達成への意欲を引き出していくことが求められている。

2 職業観・勤労観の形成過程を支援する

「職業観・勤労観の形成・確立」は青年期の重要な発達課題の一つである。この時期、子どもたちは、大人社会から与えられる既成の価値観等に疑問を投げかけ、改めて、自分はなぜ、何のために働くのか、あるいは、何を目的に生きるのかといった青年期特有の根元的な問いを抱き、それに答えようとして様々に悩み葛藤を繰り返す(図21)。それは、その後の人生において、社会人・職業人として自立していくための極めて重要なステップである。たとえ結果的に十分な答えを見いだせなくても、その過程において自分の内面を見つめ生き方を真剣に考える経験を持つことは、将来にわたってかけがえのない財産となり、豊かに生涯を送る



り、豊かに生涯を送る
土壌となるものである。

また、このような青年期の根元的な問いがどのようになされ、悩みや葛藤がどう克服されていくかについては、家族に対する基本的な信頼、それまでに経験してきた人間関係や社会参加等の在り方等、一人一人のそれまでの生育の在り方に大きく規定されるものである。将来の夢や希望、進路や職業の選択をめぐる悩みや葛藤も、幼少期からの家族や社会とのかわりや学習の積み重ねの中で培われてきた興味・関心や意欲、態度、知識・理解などを基盤としている。したがって、職業観・勤労観の形成・確立を青年期に限った課題としてではなく、子どもたちの全ての発達段階にかかわる課題として捉えることが大切である。

このような観点から今日の社会を見ると、かつて子どもたちの周りに存在し、そこでの経験が職業観・勤労観等の形成に自然につながっていくような場が次第に失われていることなど、子どもたちを取り巻く環境は決して望ましい方向にあるとは言えない。また、日常、子どもたちが手に入れる職業等に関する情報は、マスメディアを通じたものが多く、

このような観点から今日の社会を見ると、かつて子どもたちの周りに存在し、そこでの経験が職業観・勤労観等の形成に自然につながっていくような場が次第に失われていることなど、子どもたちを取り巻く環境は決して望ましい方向にあるとは言えない。また、日常、子どもたちが手に入れる職業等に関する情報は、マスメディアを通じたものが多く、

その中には、一面的で偏りがあつたり現実的でなかったりするものも少なくない。子どもたちは、確固とした自分なりの職業観・勤労観を持つことが強く求められる時代に生きながら、それを形成することが難しい状況におかれている。このことを踏まえ、職業観・勤労観の形成には、子どもたちの努力だけでなく周囲の指導・援助が不可欠であること、また、そうした形成過程への支援によって育成していくことが可能であるという共通認識を持つ必要がある。

また、このような認識に立って、職業観・勤労観の形成過程に必要な様々な体験の場を確保するとともに、経験の乏しい子どもたちに現実の社会についての多様な知識や情報を提供したり、それらを獲得、活用する方法等を身に付けさせたりして、考える力、学ぶ力、選択する力などを育成していくことが大切である。

例えば、家事の分担、学校における係活動や清掃活動、ボランティア活動や地域の共同作業等への参加、職場体験やインターンシップなどを通して、世の中にどんな仕事や職業があり、そこにはどのような苦労や喜びがあるのか等について、実感をもって学ぶことができる機会を充実させること、職業人インタビューや職業講話、調査や話し合いなどによって、職業の世界やその変化などを学習したり、職業や働くことの意義や役割等についての理解や自覚を深めたりできるようにすること、さらに、自分はどの職業に就きたいのか、どのように生きたいのかなどについて深く考える場を十分設けていくことなどが考えられる。

また、その際、児童生徒の資質や興味・関心、進路意識やその発達には個人的差異があり一様でないこと、職業観・勤労観の育成が個人の内面の成長にかかわる指導・援助であること等を踏まえ、児童生徒一人一人の状況を十分把握しながら、個別の指導・援助、相談等の充実を図ることが大切である。そのためにも、今後、教員のガイダンス・カウンセリング等にかかる資質・能力の向上を図っていくことが求められることを指摘しておきたい。

第3章 今、進路指導の在り方の何が問われているか

第1節 学習指導要領における進路指導の位置づけの改善¹⁴⁾

1 小学校

小学校学習指導要領には進路（指導）に特化した記述はなく、進路に関する指導は、一個の独立した領域として教育課程に位置づけられてはいない。しかし、今回の改訂において、総則の「第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として「各教科等の指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること」が新たに盛り込まれた。学級活動においても、取り扱う内容の例示項目の一つとして「希望や目的を持って生きる態度の形成」が新たに示され、また、総合的な学習の時間のねらいとして「自己の生き方を考えること」が設けられたほか、随所にボランティア活動をはじめとする様々な体験活動や体験的な学習を積極的に行うことが明記されるなど、生き方や進路にかかわる教育内容の充実が図られている。

このほか、特別活動には、学校行事の勤労生産・奉仕的行事をはじめとして進路指導に関連する事項が多く見られ、また、道徳では「働くことの大切さを知り、進んで働く。」、「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをする。」等が内容として示されるとともに、生活科や家庭科においては、家庭での仕事の理解と役割分担に関する内容が、社会科においては「地域の産業や消費生活の様子等の理解」、「我が国の産業及び国民生活との関連の理解」等が示されるなど、小学校における勤労や職業に関する学習の内容は相当に幅広く充実したものとなっている。学習指導要領には明記されていないものの、全教育活動を通して行われる生き方指導としての進路指導という理念は、小学校教育の中に生かされ、既にその枠組みもほぼ整えられていると考えられる。

2 中学校，高等学校

中学校，高等学校においては、進路指導は一個の独立した領域として教育課程に位置づけられている。中学校及び高等学校学習指導要領では、「総則」において、「生徒が自らの〈在り方〉生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと。」（〈 〉内は、高等学校。）としている。この点については、従前と変わらないが、今回の改訂において、学校生活への適応

14) ...P73～P76 資料21「新学習指導要領における進路及び職業に関する主な記述」参照

や現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力の育成にかかわって、「ガイダンスの機能の充実」を図ること、「地域や学校の実態，生徒の特性，進路等を考慮し，就業体験の機会の確保に配慮すること」(高等学校)が新たに規定されている。

また，既に述べたように特別活動においても「ガイダンスの機能の充実」が新たに盛り込まれるとともに，学級活動の活動内容の構成等が改められている。

さらに、「総合的な学習の時間」のねらいの一つとして、「(2)学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探求活動に主体的，創造的に取り組む態度を育て，自己の〈在り方〉生き方を考えることができるようにすること。」が設けられている。特に，高等学校においては，学習活動例として，「イ 生徒が興味・関心，進路等に応じて設定した課題について，知識の深化，総合化を図る学習活動」「ウ 自己の在り方生き方や進路について考察する活動」が示されている。このように，中学校と高等学校とではやや異なるものの，それぞれ生き方や進路についての学習との関連性を見ることができる。

このほか，道徳や各教科等における学習活動は，児童生徒の自己理解や職業世界への理解を深め，自己の可能性を発見したり高めたりする機会となるものである。特に，中学校社会科の公民的分野や高等学校公民科，中学校及び高等学校の保健体育科，中学校技術・家庭科などが深いかわりをもっており，また，高等学校の職業に関する各教科・科目における実習等は，技能の習得だけでなく，自己理解を深めたり進路情報を体験的に学んだりする貴重な場となっている。各教科・科目などにはそれぞれ目標があり，生徒はこれらの学習を通して知識や技能を身に付けていくが，それが同時に，進路に関する情報の一部となり，その情報の背景を学ぶことにつながっているのである。

進路指導は，全ての教育活動を通して進められるものであるが，その中核となる場は，特別活動の学級活動，ホームルーム活動である。そこで取り組む具体的な事項は，「(2)個人及び社会の一員としての在り方，健康や安全に関すること」及び「(3)学業生活の充実，将来の生き方と進路の適切な選択に関すること」の活動内容例として，また，学校行事の「(5)勤労生産・奉仕的行事」の内容として次のように示されている。

学級活動(中学校)，ホームルーム活動(高等学校)の活動内容(抜粋)
()は高等学校

第4章 特別活動 第2のA 学級活動(ホームルーム活動)

(2) 個人及び社会の一員としての(在り方)生き方，健康や安全に関すること。

ア 青年期の不安や悩み(悩みや課題)とその解決，自己及び他者の個性の理解

と尊重，社会の一員としての自覚と責任（社会生活における役割の自覚と自己責任），男女相互の理解と協力，望ましい人間関係の確立（コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立），ボランティア活動の意義の理解，（国際理解と国際交流）など

(3) 学業生活の充実，将来の生き方と進路の適切な選択（決定）に関すること。

学ぶことの意義の理解，自主的（主体的）な学習態度の形成（確立）と学校図書館の利用，選択教科等（教科・科目）の適切な選択，進路適性の吟味（理解）と進路情報の活用，望ましい職業観・勤労観の形成（確立），主体的な進路の選択（決定）と将来設計など

中学校，高等学校の学校行事における「勤労生産・奉仕的行事」の活動内容

第4章 特別活動 第2のC 学校行事

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し，職業や進路にかかわる啓発的な体験（職業観の形成や進路の選択決定などに資する体験）が得られるようにするとともに，ボランティア活動など社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。

「望ましい職業観・勤労観の形成（確立）」は，「自己の適性の理解」，「進路（職業）情報の理解と活用」，「進路の設計，進路の選択（決定）」などとともに，上記「(3)学業の充実，将来の生き方と進路の適切な選択（決定）に関すること」の活動内容の例として示されているものである。

このことについては，進路選択（決定）に至る過程（自己の適性と進路（職業）情報の理解 それに基づく職業観・勤労観の形成 将来計画の立案 進路の選択（決定））を論理的な流れとして示しているとも見ることが出来る。しかし，実際は，それぞれが単独に，また，順を追って深化・発展していくのではなく，相互に深く影響し合いながら，スパイラル的に全体として高められていくものであることに留意しておきたい。そうした中で，職業観・勤労観の形成（確立）は，他の活動の全てが結びつく結節点として重要な位置を占めており，その意味で進路指導の根幹をなすものである。職業観・勤労観の育成を図るに当たっては，この点に留意し，常に，進路指導の活動全体，つまり，学校の教育活動全体を視野に入れて取り組んでいくことが大切である。

第2節 進路指導の改善・充実に向けた主な課題

1 「進路指導」に対する正しい認識の共有

進路指導は生き方にかかわる組織的・継続的な指導・援助である。このため、進路指導の取組を進めるに当たっては、常に、子どもたち一人一人の内面の成長・発達を促すとともに、将来、職業人・社会人としてよりよく自己を生かしていく基盤となる能力や態度を育成していくという基本姿勢が強く求められる。

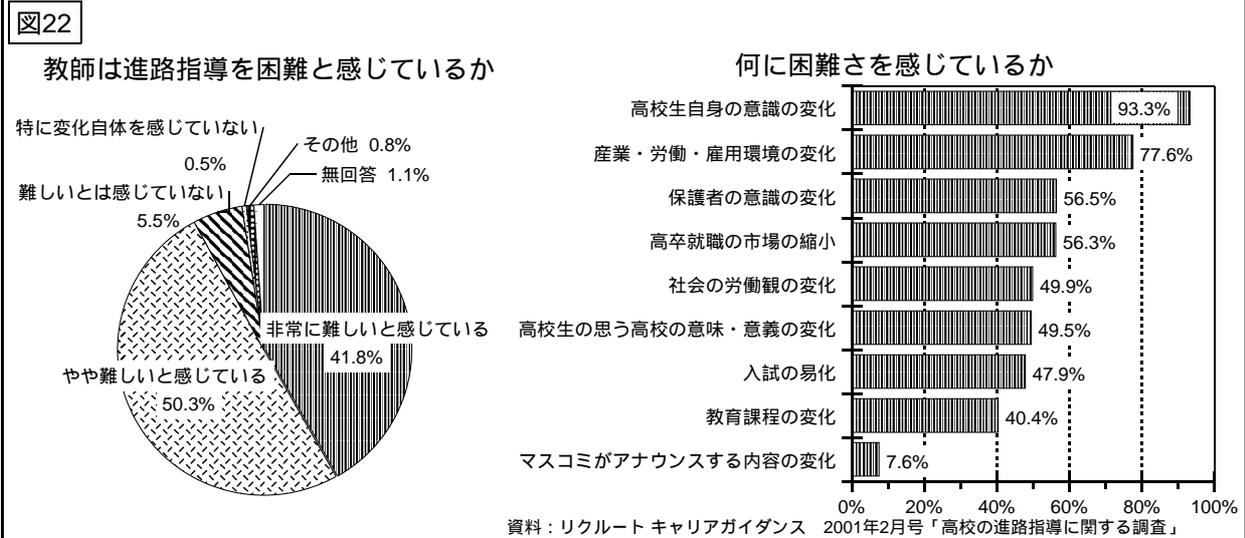
しかし、進路指導が、生徒が当該学校から次のステップへ進む際の進路の選択についての指導と理解され、卒業時のいわゆる「出口指導」とされている状況は未だに払拭されていない。あるいは、一定の理解は進んでも、一部の教員だけの実践に終わり、全校的な取組に結びついていかないという状況は、今なお、少なからず見受けられる。

このように、本来の進路指導が学校全体で十分に展開されないのはなぜか。その要因として、教員の進路指導に対する考え方が、自分自身が中学校・高等学校時代に経験した進路指導に強く制約されてしまっていること、生き方指導としての進路指導の必要性を強く感じるできないこと、進路指導の取組の具体的な進め方について、実践を通して学ぶ経験が得られにくく、必要な知識・技術を十分習得できていないこと、教員の間での考え方の相違が大きく、校内の共通理解や協力体制が得られにくいことなどが考えられる。

そして、もう一つ、重要な要因として、進学先や就職先の選定・紹介や合格可能性をよりどころにした指導が、これまで、生徒の学習等への積極的姿勢を喚起する上で有効に機能し、また、多くの生徒や保護者に受け入れられてきたという事情があると考えられる。言い換えれば、進学指導・就職指導だけの進路指導であっても、それによる不都合は大きく表面化しない時代背景があったとも言えよう。

しかし、既に述べたとおり、進路をめぐる社会環境が大きく変化する中で、進学指導や就職指導だけの進路指導は有効に機能しにくくなっている。また、そうした中で、進路指導を困難だと感じている教員は相当に多い(図22)。今、必要とされるのは、子どもたちが学ぶことや働くことへの意欲を持ち、職業観・勤労観をはじめ、選択や適応の能力を形成していくことを支援する、きめ細かな温かい下支えである。長年の課題として指摘され続けてきた本来の進路指導への転換が、今、猶予を許されない緊急の課題となっていることを踏まえ、教職員全体が、進路指導とは本来どのようなものかについての理解・認識を共有し、指導内容・方法及び指導計画の見直し・改善等を積極的に行っていくことが強く

求められる。

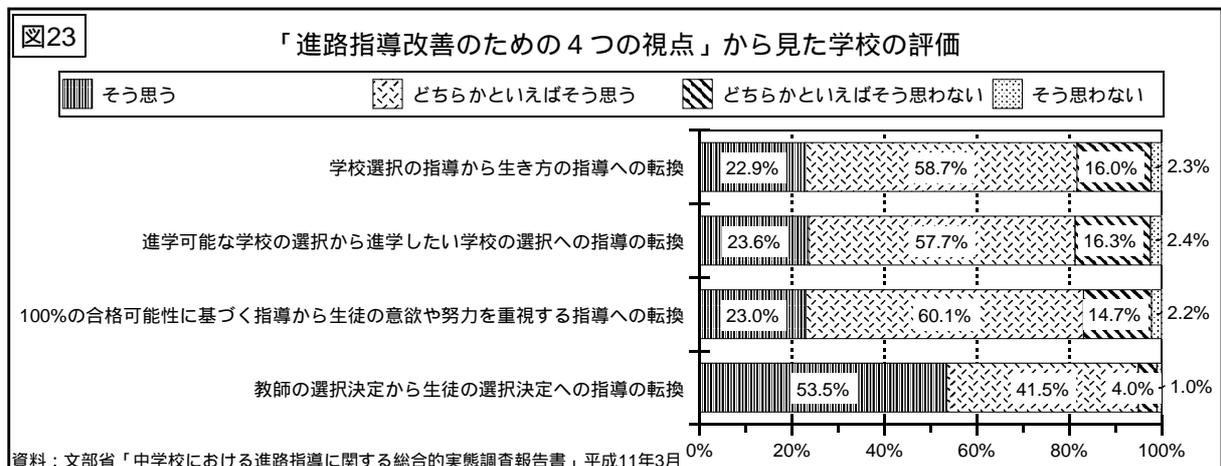


2 指導内容・方法等の改善・工夫

(1) 中学校の取組の現状から

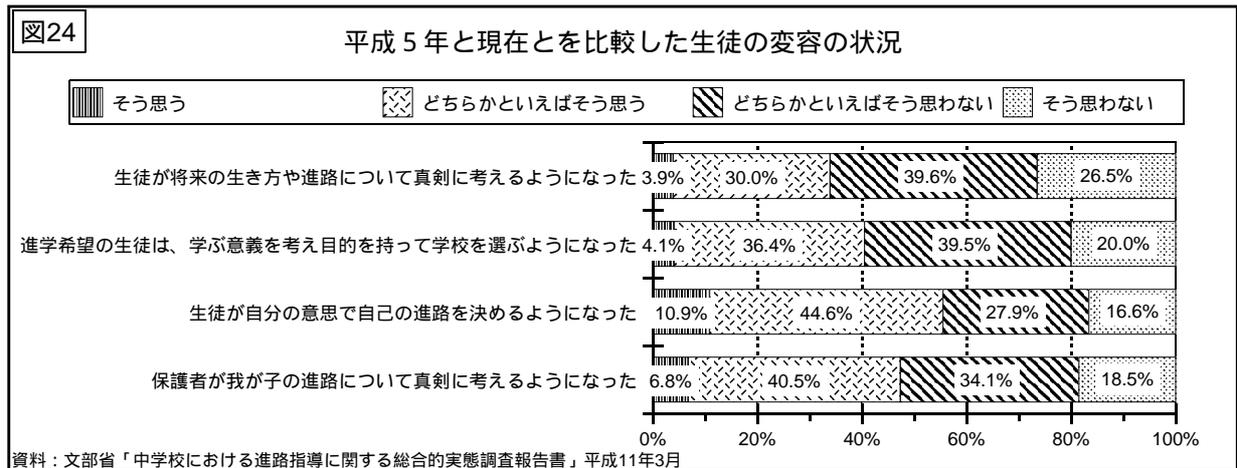
中学校においては、本来の進路指導の在り方に立って、進路指導の改善充実に向けた努力が行われてきている。平成5年の文部省事務次官通知で、業者テスト及び偏差値に過度に依存した進路指導を抜本的に見直す必要があるとして、学校選択の指導から生き方の指導への転換、進学可能な学校の選択から進学したい学校の選択への指導の転換、100%の合格可能性に基づく指導から生徒の意欲や努力を重視する指導への転換、教師の選択決定から生徒の選択決定への指導の転換という4つの視点が示された。以降、この視点に沿って、中学校の進路指導の在り方は大きく変貌してきている。

「中学校における進路指導に関する総合的実態調査報告書」(平成11年3月)によれば、この4つの視点に立って、進路指導の改善充実が図られたとする学級担任教員の割合は、全ての項目について80%を越えている(図23)。



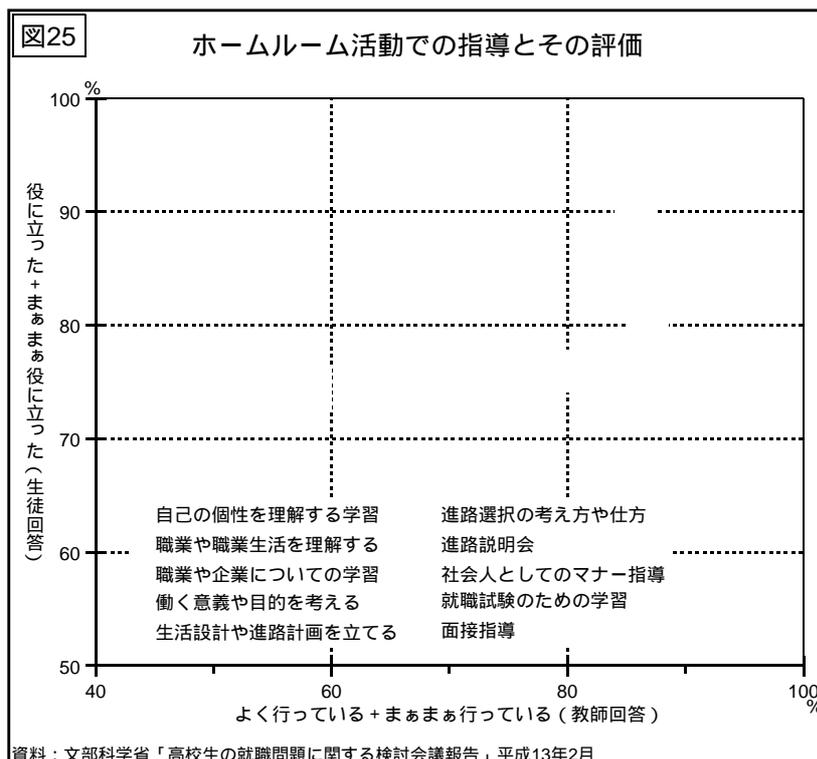
また、取組の内容についても、高等学校への訪問・見学，体験入学等に加え，職場訪問や見学，職業調査，職場・福祉施設等における体験学習，社会人による生き方や進路に関する講話，卒業生による体験発表会など多様で幅広いものになってきている。

しかし，その反面，「生徒が将来の生き方や進路について真剣に考えるようになった」かどうか，あるいは，「進学希望の生徒は，学ぶ意義を考え目的をもって学校を選ぶようになった」かどうかなど，進路意識や進路選択態度の変容については，肯定・否定が相半ばしており（図24），学校の取組が生徒の意識の変容につながっていない状況が見られる。



(2) 高等学校の取組の現状から

「高校生の就職問題検討会議報告書」（平成13年2月）には，高等学校における進路学

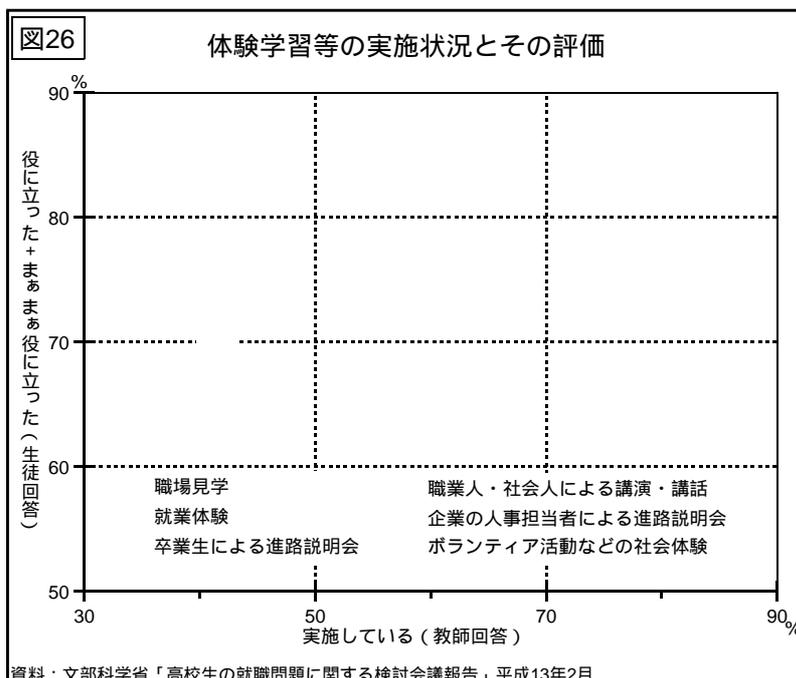


習や就職のための指導についての調査結果とともに，それぞれの指導に対する生徒からの評価についての調査結果が示されている。この結果を，横軸に実施状況を，縦軸に生徒の評価をとってグラフ化してみると（図25），各項目とも，「よく行っている」と「まあまあ行っている」の割合はかなり高く，これまで，いわ

ゆる出口指導に極端に偏った進路指導の在り方が課題として指摘されてきたことを考えると、一定の改善が図られていると考えられる。また、これらについては、各項目について「役に立った」、「まあまあ役に立った」がかなり高い割合を占め、概ね良好な評価を得ている。

しかし、項目別には、「面接指導」や「進路説明会」等、就職のための直接的な（採用選考に合格するための）学習や指導が高い割合を示しているのに比べ、「職業や企業についての学習」、「生活設計や進路計画を立てる学習」、「働く意義や目的を考える学習」等、職業観・勤労観等を培う上で基本に据えられるべき取組の割合は低くなっている。既に見たように、高校生の進路指導に対する要望は、「自分が何に向いているかを知るための学習」が格段に高く、次いで、「進路に関する情報や資料の充実」、「将来の仕事に役立つ知識・技術の学習」、「現場実習などの就業体験」、「職業について知るための学習」などの順となっている（図18）。これらを上図との関連で見ると、そのほとんどは実施率、評価ともに必ずしも高くない項目に属する事柄であることがわかる。

同様に、体験学習の実施状況及び生徒からの評価をみると（図26）、実施状況について

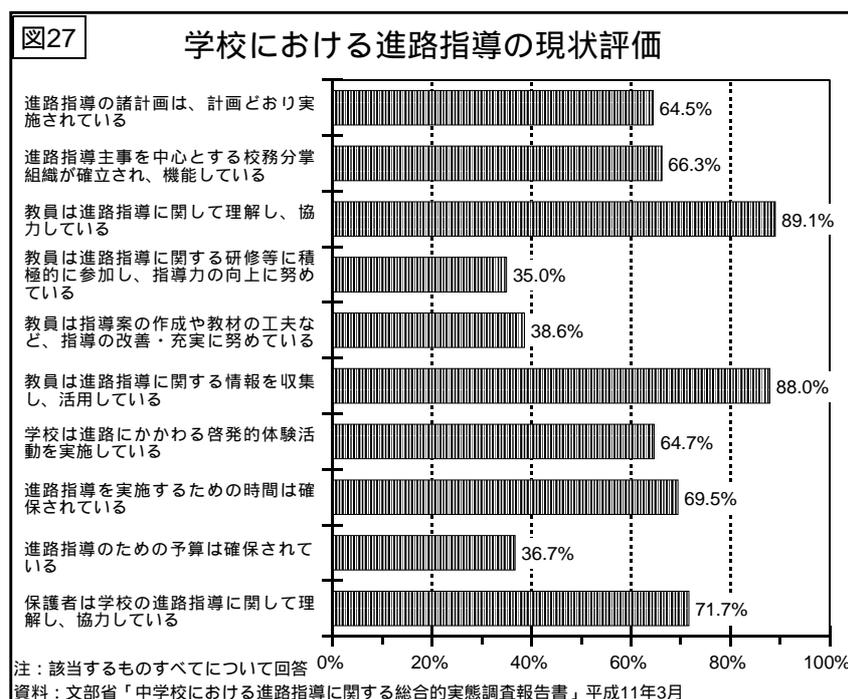


は、項目による差異は大きいですが、生徒の評価については、各項目とも概ね良好な結果を得ている。特に、「就業体験」や「企業の人事担当者による進路説明会」等は、実施状況が高くないにもかかわらず、体験した生徒から高い評価を得ていることが注目される。

(3) 生徒の心に届く指導・援助

(1)で見た中学校における取組が生徒の意識の変容に結びつきにくいのは、受験する高等学校等を選択するという最終段階での選択行動に、それまでの取組の成果が反映されにくいという事情も影響していると考えられる。しかし、学校における進路指導の現状評価においては、教員が指導の改善・充実や指導力の向上に努めているとする割合は、他の項

目に比べ相当低くなっており（図27）、生徒の意識の変容が進まない状況については、指導計画や方法等の在り方にかかる課題を示すものとして受け止めることが必要であろう。



また、高等学校についても、進路指導の取組は、依然として、軸足が出口指導に置かれていたり、生徒の要望や評価との間に相当のズレが見られたりすることから、指導計画・方法の見直し・改善とともに、生き方指導の充実に向けた積極的な対応が求められる。

進路指導に限らず、総じて、学校における人間としての生き方の指導が、生徒の心に十分届くものになっていないといった指摘がなされることも少なくない。また、既に述べたように、「豊かさ」が増し、「多様化」が進む中で、進路や生き方の選択にかかる青年期の葛藤や心理的な圧迫は、本人が意識するしないにかかわらず、その強さを増していると考えられる。

こうした状況の中で、進路指導の取組をより実効あるものにしていくためには、生徒の実態や学習ニーズを踏まえつつ、それぞれが何を目的とするものであるかをその都度十分確認するとともに、その活動が生徒の意識の変容にどれほどの影響を与えることができるかという観点から、常に指導計画・内容・方法等を点検し、見直していくことが必要である。そのため、本研究所教育課程研究センターで開発された「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（平成14年2月）」やその手法を活用していくことも有効な方策として考えられる。こうしたことと、先に述べた「ガイダンスの機能の充実」とを併せ、生徒の心に届く指導・援助となるよう、一人一人をしっかりと理解し、温かくきめ細かく支えていく姿勢を一層確立していくことが大切である。

(4) 小・中・高等学校の連携による一貫した取組の推進

進路指導の取組は、教科指導等の場合と同様、児童・生徒の発達段階による興味・関心

や意欲，理解・認識能力等の違いを踏まえて行われる必要があるのはもちろんである。既に見たように，学習指導要領においては，小・中・高等学校一貫して生き方指導の充実を図ることが示されている。また，子どもたちの成長・発達は，段階を追って順次達成されていくものであり，当面する課題の克服は，次のステップでの課題に立ち向かう際の重要な基盤となるものである。このため，小・中・高等学校の各段階における生き方指導や進路指導の取組には，児童生徒の発達の全体を見通した適時性や系統性が求められる。

例えば，職業調べや職場見学は，小・中・高等学校の各段階で実施されているが，その目的やねらいは，教育課程への位置づけの在り方だけでなく，子どもたちの発達段階によって自ずと異なるはずである。確かに，同じような活動を行っても，発達段階が異なれば身に付けてくるものが違ったり，あるいは，目的やねらい以外にも多くのことを学んだりする場合も少なくない。しかし，指導する側の適時性や系統性に対する意識が低い場合，創意工夫や意識付けの乏しい同じような活動が異なる校種で繰り返され，児童生徒のやる気を削いでしまったり，惰性に流された成果の乏しい取組に終わってしまう危険性は大きい。しかし，意識が高ければ，活動の目的やねらいが明確になり，取組への熱意や創意・工夫が生まれ，それが児童生徒の活動意欲を高め，ひいては当該活動の大きな成果につながっていくのである。

こうしたことを踏まえ，今後，小・中・高等学校それぞれが，生き方指導や進路指導において自らの果たすべき役割をしっかりと認識するとともに，互いの取組についての十分な情報交換等を行い，子どもたちの発達段階に応じた創意・工夫ある活動を進めていくことが求められる。

3 計画的・組織的な進路指導の展開

(1) 進路指導全体計画の作成

指導計画，内容，方法の見直しにあたっては，進路指導が，特別活動だけでなく学校の全教育活動を通して計画的，組織的に行われるものであることを踏まえ，道徳，各教科，総合的な学習の時間における取組等の全体をしっかりと視野に入れて行う必要がある。その意味で，進路指導の取組にかかる全体計画の作成・実施は，進路指導に対する正しい認識を共有していく上でも重要である。特に，新教育課程においては，学校完全週5日制への対応に伴う授業時間の縮減，総合的な学習の時間の新設，選択履修幅の拡大が行われるなど，従来の枠組が大きく変化している。進路指導の取組にかかる全体計画についても，

こうしたことに十分留意し，特別活動，各教科，道徳，総合的な学習の時間それぞれの目標・ねらい等を踏まえながら，相互の有機的な関連を図るとともに，取扱う内容，方法，指導計画，評価の在り方等について十分検討し，より計画的・組織的に実施していくことができるようにすることが大切である。

また，中学校，高等学校の新教育課程では，全ての生徒が共通に履修する教科（科目）の合計時数（単位数）の縮減，総合的な学習の時間，選択教科や高等学校での学校設定教科・科目の設置等，生徒，学校，地域の実態や特色等に応じて，各学校がより弾力的に教育課程の編成を行うことが可能となり，学習活動における生徒の選択幅が一層拡大されることになった。これに伴い，生徒が自己の特性や将来の進路等とのかかわりにおいて，選択教科・科目を適切に選択できるようにすることがこれまで以上に重要になっている。このため，選択教科等の開設計画を妥当なものにするるとともに，生徒の適切な選択を指導・援助するガイダンスを，学校全体の取組としてどのように計画的・系統的に行っていくかが，大きな課題となってくる。こうしたことを踏まえ，ガイダンスの場や機会が従来のみで十分なのかどうか等について点検し，生徒の入学から卒業までを見通した上で，また，生徒の発達段階や実態を踏まえながら，何についてのガイダンスを，いつ，どのような形でどれだけ行っていくかという視点から見直して，全体計画に反映していくことが求められる。

(2) 体験活動の充実

学習指導要領では，中学校においては職業や進路にかかわる啓発的体験，ボランティア活動や自然体験，社会体験等の啓発的体験の場の確保が，高等学校においては，これらに加えて，就業体験の機会の確保に配慮することが求められている。さらに，平成13年7月の学校教育法及び社会教育法の一部改正により，小・中・高等学校等において，社会奉仕体験活動や自然体験活動等の充実に努めることが新たに盛り込まれたところである。既に述べたように，職業観・勤労観の育成等を図る上で，子どもたちの直接体験は極めて重要な意味を持っている¹⁵⁾。進路指導全体計画等の見直しに当たっては，学習指導要領の改訂及び上記の法改正の趣旨等を踏まえ，各学校が保護者や地域との連携を一層深め，進路や職業に関する啓発的体験やボランティア活動等の充実に十分留意して進めていくこと

15) ...P77～P81 資料22「職場体験，インターンシップ実施状況」，資料23「『トライやる・ウィーク』実施後のアンケート調査結果」参照

が大切である。

その際、各学校においては、生徒の発達段階や他校種においてどのような取組が行われているか等に留意しながら、それぞれの体験活動が、何を主なねらいとしているのか、そのためには、いつ、どの程度の期間で実施する必要があるのか、さらには、特別活動、総合的な学習の時間、関係する各教科・科目等の目標やねらい・特質を踏まえ、教育課程にどのように位置づけるのが適切かなど、学校の教育計画全体を見通した中で検討することが大切である。従来、特別活動で行われていた体験活動を安易に総合的な学習の時間に組み替えてしまったり、明確なねらいや目標、計画性や創意工夫のない体験活動が積み重ねられたりすることのないよう十分留意する必要がある。

4 産業・経済社会の現実についての的確な情報提供

情報化が著しく進展する中、子どもたちが接する職業関連の情報は、マスメディア等を通して得られる間接的なものが飛躍的に増大している。その中には、脚色された仮想の現実であるものも少なくない。このような環境の下で、子どもたちの中には、現実を十分に知らない、または、知らされないまま、仮想の現実と現実とを混同したり、自分の「やりたいこと」への思いを募らせたりしている状況が見られることなどが様々に指摘され、子どもたちの職業に対する意識や理解が、現実から遊離したものになってきているのではないかといったことが懸念されている。いわゆるフリーター志向についても、フリーターという用語が社会的に認知されるようになったことから、あたかも有力な進路の選択肢の一つであると見なしてしまう傾向が、本人にも保護者にも見られるが、フリーターの置かれている厳しい現状や彼らの不安や悩みについては、驚くほど無知である場合も少なくない。

「やりたいこと」を持つこと自体は、評価されるべきものである。しかし、それが現実をほとんど知らない中での思い込みであったり、自分を生かせる他の道を見ようとしないう偏狭なこだわりであったりする可能性もある。現実を知らない、または、知らされない中でのこのような必要以上のこだわり、あるいは、安易なあきらめが子どもたちの進路決定を左右していくことは、進路指導において極力避けなければならない。

このため、進路指導の取組においては、職業世界の現実と接する機会を適切に確保し、子どもたちの発達段階を踏まえつつ、上記3の(2)で述べた様々な体験活動の充実をはじめ、職業調べや職場見学、職業人・先輩等の経験等の活用、産業・経済の動きや雇用の変化等についての情報提供などにより、職業の世界の実際が生徒に現実感をもって見える

ようにしていくことが大切である。また、その際、進路指導が進路を絞り込んでいくためだけでなく、子どもたちが自分の可能性を新たに発見していくためのものでもあることに留意し、「やりたいこと」や「やれること」を広げていく視点も大切にしておきたい。

なお、地域・企業等の協力を得て行う上記のような体験活動等が、多くの学校で幅広く円滑に実施できるようにするためには、受け入れ企業等の開拓・確保やそのリストの作成及び情報提供、さらには、生徒・学校の希望と企業等の受け入れとのマッチング等を図る仕組みを整えていく必要がある。この点については、既に、インターンシップの実施や職業人講師等の派遣などにおいて、地元の経済団体の積極的な支援を得たり、ハローワークから紹介を受けたりしている地域も出てきている。そうした取組を参考にして、地域の実情に応じ、学校と地域等とが共同でシステムづくりを進めることが大切である。

また、指導に当たる教員自身が、長期社会体験研修等を通じて産業界の動きや職場の実情についての見聞と認識を深めることが大切である。このことを通して、生徒の進路情報の収集・探索活動への適切な助言や生きた情報の提供等が行われるようになるとともに、そこで得た実感が教員の進路指導に対する意識の改革や自信につながっていくという幅広い効果が期待できるからである。

第4章 職業観・勤労観を育む進路指導をどのように進めるか

第1節 職業的（進路）発達と諸能力の育成

1 職業的（進路）発達と進路指導

児童生徒の心身は発達段階を一步一步上っていきながら成熟していく。進路指導の取組を進めるに当たっては、そうした発達の過程にある児童生徒一人一人が、それぞれの段階に応じて適切に自己と進路・職業との「関係付け」を行い、職業的（進路）発達を遂げていくことができるよう、指導・援助していくことが大切である。

職業的（進路）発達には様々な側面がある。自己理解、進路への関心・意欲、職業観・勤労観、職業の世界や進路先についての知識や情報、進路の選択や意思決定、職業生活に関連した習慣・行動様式や必要な技術・技能などである。

また、人間の成長・発達の過程には節目となる発達段階があり、それぞれの発達段階において克服しておくべき発達上の課題があるように、職業的（進路）発達にも、いくつかの段階（節目）があり、各段階で取り組まなければならない課題がある。これが、職業的（進路）発達課題と呼ばれるものであり、職業・進路の選択能力及び将来の職業人として必要な能力・資質の形成という側面から、発達上の課題をとらえたものである。例えば、児童、生徒、青年、成人を段階とした場合、それぞれ、職業上の好みを自覚する、その好みを具体化し特定化する、職業を選択する、選択した職業において自己実現を図るなどの課題がある。こうした課題に取り組み、解決するという連続的過程を経て、一人一人の職業的（進路）発達が達成されていくのである。

進路指導の取組は、このような職業的（進路）発達の段階とその諸側面の全体を念頭におきながら進められなければならない。しかし、従来、どの教科・科目の学業成績が優れているかなどに基づいて、何を選択するかについて指導・援助することに重きが置かれがちであったり、小学校・中学校・高等学校間の連続性や一貫性といった視点が希薄であったりしたことなど、進路指導の取組において、必ずしも「発達」の視点が明確に意識されていたとは言い難い。また、そのため、各発達段階において、どのような能力や態度を身に付けさせようとするのかという「能力・態度」の到達目標を設定する必要性についても、十分な理解がなされなかったのではないかと考えられる。そして、そのことが進路指導の取組の系統性や計画性を曖昧にしたり、特別活動、各教科、道徳等の有機的な関連づけを進みにくくしたりしているのではないかと考えられる。小学校段階からの職業的（進路）発達及びそれ

を支える諸能力の育成の視点に立って、より組織的、計画的、系統的で実効ある進路指導を展開していくことが強く求められる。

なお、職業的（進路）発達には、身体的、知的、社会的、情緒的発達などと相互に密接に関連し影響しあいながら達成されていくものであること、また、一般に発達は自然に起こるものではなく、特に、職業的（進路）発達においては、家庭、学校、地域社会などの様々な働きかけが必要であることに十分留意しておきたい。

2 学校段階における職業的（進路）発達課題

学校段階における職業的（進路）発達課題については、概ね以下のように捉えることができよう。なお、これは、あくまで一般的な目安であって、発達には個人差があることなどから、画一的に扱うことは避けなければならない。しかし、他面、発達課題は加齢等による心身の成長・発達に基づく側面だけでなく、例えば、中学校・高等学校の最終学年においては、上級学校への進学や就職といった進路の選択・決定を行わなければならないなど、現行の諸制度への対応という側面から規定されてくることにも留意しておきたい。

(1) 小学校段階

職業的（進路）発達の過程から見れば、小学校段階は、進路の探索・選択等にかかる基盤を形成する時期である。この時期、児童は、働くことの大切さや世の中には様々な職業があることを理解しながら、日々の生活と産業や職業とのかかわりを考え、「大きくなったら何になりたいか」、「将来どのような道に進みたいか」など、将来の生き方や職業への「夢や希望」を膨らませていく。こうした「夢や希望」は、直ちに進路の選択に結びつくものではないが、家族や地域社会等への信頼を基礎に、将来への明るい展望や自己の可能性への期待を広げるといった深い意味を持つものである。

したがって、この時期の主な発達課題としては、夢や希望を描き自分はこんな人間になりたいという自己イメージを獲得すること、そのため、自己及び他者への積極的関心を形成し発展させ、身の回りの仕事や環境に対する関心・意欲を向上させること、勤労を重んじ目標に向かって努力することの大切さを、身をもって学んでいくことなどがあげられる。

こうしたことを踏まえ、小学校においては、子どもたちが家庭、学校、地域での諸活動の中で、その一員としての役割を果たすことなどを通して、自分の良さや得意分野に気づき、日々の生活の中でそれを生かそうとする意欲や態度をもつことができるようにすること、身の回りの職場や施設の見学等を通して、自分たちの生活と職業との関係を考え、職

業に対する基礎的な知識・理解を得ることなどができるようにすることなどを主眼として、取組を進めることが大切である。また、卒業後の中学校生活における新しい環境や人間関係についての理解や心構えを持つことができるよう、指導・援助することが求められる。

(2) 中学校段階

中学校段階は、進路にかかわる現実的探索と暫定的選択を行う時期である。自我に目覚め個性の自覚を高める青年前期に当たるこの時期、生徒は、産業や職業に関する基礎的な知識を広め、また、働くことの意義や役割等の理解を深めながら、自己の個性や生き方と進路との関係を考え始める。いわば、人生最初の現実的な進路の探索に出発するが、一般に、この時期には、特定の進路（職業）へ結晶化するのは困難であることから、ある範囲の幅をもつ大筋の方向付けという性格を持つと考えられる。

したがって、この時期の主な発達課題としては、生き方や進路に関する現実的な探索を積極的に行うことができるようになること、そのため、肯定的な自己理解や自己有用感を獲得し、興味・関心や職業に関する基礎的な知識・理解等に基づく選択基準を形成すること、暫定的な進路計画を立案したり、主体的によりよい選択をしようとしたりする姿勢を身に付けることなどがあげられる。

こうしたことを踏まえ、中学校においては、生徒が自分の良さや得意分野を理解すること、能力・適性、価値観等についての基本的・総合的理解を得ること、働くことの厳しさや喜びを体得しながら、職業の世界についての理解を深めること、仕事や勉学などについて探索活動を行うための方法などを理解することなどができるようにするための取組を進めることが大切である。また、就職及び高等学校等に進学することの意味を考え、希望する進路先の情報を入手して理解を深めることを通して、自覚をもって進路を選択することができるよう、指導・援助することが求められる。

(3) 高等学校段階

高等学校段階は、進路の現実的探索を深化させ社会的移行を準備する時期である。この時期、身体面の発達は安定化の方向に向かうが、精神面の発達は著しく、生徒は、「自分とはいかなる人間であるか」、「生きることや働くことにどのような意味があるのか」などと自らに厳しく問いかけ、自我の確立や価値観の形成に向けて悩んだり、激しい葛藤を経験したりする。それは同時に、自己理解を一層深め、現実吟味を行いながら将来への展望を明確化していく過程であり、主体的な選択の基準となる職業観・勤労観を確立し、職

業人・社会人としての自立を果たしていくための試練でもある。

したがって、この時期の主な発達課題としては、自己理解を深めその自己を受容できること、多様な生き方や進路・職業の理解の上に立って、自分なりの選択基準となる人生観や職業観・勤労観等を身に付けること、それらを基に自己の将来を設計し、社会的移行の準備を行うこと、そして、そのための現実吟味を十分行い、積極的に試行することなどをあげることができる。このほか、職業等に関する専門的な技能を習得することなど、高等学校段階の職業的（進路）発達課題は、極めて広範かつ多様である。

こうしたことを踏まえ、高等学校においては、生徒一人一人が自己の個性をできるだけ確に把握すること、インターンシップ等による試行を通して、職業の世界の現実をしっかりと認識し、将来の生き方や職業を適切に選択することなどができるようにするための取組を進めることが大切である。また、自己の希望や能力・適性等に照らして、現実に行おうとしている選択が妥当性を持つかどうか等についても十分検討できるよう、指導・援助することが求められる。

3 職業的（進路）発達段階を踏まえた諸能力と態度の育成

児童・生徒の職業的（進路）発達を促すためには、進路指導の取組を単に多様な取組の集合として終わらせるのではなく、発達を促すという視点に立って、小・中・高の各段階の目標となる育成すべき具体的能力や態度を設定し、それを基本的な軸とする構造化された枠組みに基づいて展開していくことが大切である。

また、その際、個々の生徒の進路の選択・決定や適応にかかる諸能力や態度をどのような過程を踏んで伸ばさせていくか、また、どのような状態を指して伸ばしたとするのかという観点を明確にしておく必要がある。それは、活動の成果を検証したりその後の指導に生かしたりするための評価の観点と言うべきものでもある。そうした観点を持つことが、進路指導をより一層計画的・組織的、系統的なものにし、その実効性を高めていく上で重要な役割を果たすと考えられるからである。

なお、この場合の能力・態度は、知的・体験的な学習を通して獲得した知識や技能等を活用して、選択等にかかる意思決定や人間関係づくりなど、ある具体的な事態や課題に取り組んだり達成したりする際に必要な能力・態度を意味している。したがって、全ての児童生徒が共通に身に付ける必要があり、また、訓練によって習熟が可能な能力であることを理解しておきたい。

第2節 職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）

1 学習プログラムの枠組み（例）の構造

職業的（進路）発達理論に基づいて、各発達段階で育成すべき能力についてなされた研究として、旧文部省の委託調査研究「職業教育・進路指導に関する基礎的研究」（平成8・9年度）がある。この研究において開発された「4つの能力を発達させる進路指導活動モデル」では、能力領域を キャリア設計能力、 キャリア情報探索・活用能力、 意思決定能力、 人間関係能力の4つに分類した上で、これらをさらに12の能力に分け、小・中・高等学校の各段階で育成すべき具体的な能力レベルが示されている。

本調査研究で開発した「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」（別表）は、こうした先行研究の成果を参考にしつつ、直接・間接に職業観・勤労観の形成の支えになると同時に、職業観・勤労観に支えられて発達する能力・態度にはどのようなものがあるかという視点に立って、各学校段階（小学校については低学年、中学年、高学年に細分割）で育成することが期待される能力・態度を改めて検討して作成したものである。

その際、新たに小・中・高等学校の各段階における職業的（進路）発達課題を検討・整理し、これらの課題達成との関連で上記の具体的な能力・態度を示すことができるように構成するとともに、能力領域については、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域に大別し、それぞれを構成する能力を再編成して、各2つずつ計8つの能力に整理している。

職業観・勤労観の育成に当たっては、それが一人一人の職業的（進路）発達の全体を通して形成されるという視点に立って、段階的・系統的に取り組むことが大切である。このため、「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」では、職業的（進路）発達の全体を視野に入れ、職業観・勤労観の形成に関係する能力を幅広く取り上げている。その上で、学校段階ごとの職業的（進路）発達課題との関連を考慮し、各段階ごとに身に付けさせたい能力・態度を一般的な目安として示している。

また、能力の発達は、順序を追って積み重ねていくことによって効果的に習得できることなどを踏まえ、同一能力の育成については、やさしいものからより高度なものへ、具体的なものから抽象的なものへ、自分中心から他者との関連重視へと、小・中・高等学校12年間を通して段階的・系統的に取り組まれるよう構造化している。

2 学習プログラムの枠組み（例）の活用にあたっての留意点

枠組み（例）は、4つの能力を観点として児童生徒の発達を見ていく見取り図ともいうべきものである。したがって、各学校において、児童生徒がどのような能力・態度がどの程度身についているか等について点検したり、評価したりする際の一つの参考として、この枠組み（例）を活用することが可能である。また、現在行われている各学校の一つ一つの活動が、どのような能力の育成を目指したものなのかを明確にしたり、全体としてバランスのとれた取組となっているか、どの能力・態度の育成にかかる取組が不足しているのか等について、点検・見直しを行ったりする際の参考として活用できるものとなっている。実際には、それぞれの活動ごとに評価規準を作成し、これらの能力・態度の達成状況を見ていくことが必要となってくる。

枠組み（例）は、学校において取り組むべき新たな活動を提案しようとするものではない。むしろ、既に実施している活動について、それぞれの持つ意味を確認し、活動全体を有機的に関連付けて、より効果的なものにしていくために活用されることを意図している。同じ活動を行っても、指導する側が活動の趣旨やねらい、その方法や評価の観点等を明確に設定し認識しているかどうかによって、その効果には大きな差がでてくるからである。

実践にあたっては、4つの能力は相互に深く影響を与えあうものであること、また、一つの活動によって複数の能力・態度の伸長が可能であることなどに留意し、特定の発達段階（学年）において、特定の能力の伸長を図るという考え方ではなく、全ての段階（学年）において、4つの能力の全体を総合的に発達させることを目指して取り組むようにすることが大切である。

繰り返しになるが、職業観・勤労観の育成は、特別活動、各教科、道徳、総合的な学習の時間等、学校の全教育活動を通して行われなければならない。枠組み（例）は、このことを前提とし、小・中・高等学校における取組が、計画的、組織的かつ系統的に推進されることを願って研究開発したものである。これまでの進路指導の全体計画、内容・方法等の在り方を改めて点検・評価し、今後の指導に生かしていくことが期待される。

なお、枠組み（例）の活用の一例として、小学校における係活動、中学校の職場体験活動、高等学校のインターンシップを取り上げ、これらの取組を進めることによって養うことができる能力・態度にはどのようなものがあるのか、そうした能力・態度をより効果的に伸長するためには、指導上どういった点に留意する必要があるのか等を示した参考例を添付している。

3 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例） - 職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から

太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

		小 学 校			中 学 校	高 等 学 校	
		低 学 年	中 学 年	高 学 年			
職業的（進路）発達の段階		進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期			現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期	
職業的（進路）発達課題（小～高等学校段階） 各発達段階において達成しておくべき課題を、 進路・職業の選択能力及び将来の職業人として 必要な資質の形成という側面から捉えたもの。		<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 			<ul style="list-style-type: none"> 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 進路計画の立案と暫定的選択 生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己受容 選択基準としての職業観・勤労観の確立 将来設計の立案と社会的移行の準備 進路の現実吟味と試行的参加 	
職業的（進路）発達にかかわる諸能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度					
領域	領域説明	能力説明					
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 友達と仲良く遊び、助け合う。 お世話になった人などに感謝し親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところを見つける。 友達のよいところを認め、励まし合う。 自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の長所や欠点に気付く、自分らしさを発揮する。 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 自分の悩みを話せる人を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする。 他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 互いに支え合い分かり合える友人を得る。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事をする。 「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 自分の考えをみんなの前で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 友達の気持ちや考えを理解しようとする。 友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 異年齢集団の活動に積極的に参加し、役割と責任を果たそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 リーダーとフォロワーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 新しい環境や人間関係に適応する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する。 異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に合った適切なコミュニケーションを図る。 リーダー・フォロアースキップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 新しい環境や人間関係を生かす。
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな職業や生き方が分かる。 分からないことを、図鑑などで調べたり、質問したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 自分に必要な情報を探す。 気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。 生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・収集・整理し活用する。 必要に応じて、獲得した情報に創意工夫を加え、提示、発表、発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 就職後の学習の機会や上級学校卒業時の就職等に関する情報を探索する。 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続き・方法などが分かる。 調べたことなどを自分の考えを交え、各種メディアを通して発表・発信する。
		【職業理解能力】 様々な体験を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 係や当番の活動に取り組む、それらの大切さが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 係や当番活動に積極的に参加する。 働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設・職場見学等を通して、働くことの大切さや苦労が分かる。 学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> 就業等の社会参加や上級学校での学習等に関する探索的・試行的な体験に取り組む。 社会規範やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し、習得する。 多様な職業観・勤労観を理解し、職業・勤労に対する理解・認識を深める。
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 仕事における役割の関連性や変化に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 ライフステージに応じた個人的・社会的役割や責任を理解する。 将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する。
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 作業の準備や片づけをする。 決められた時間やきまりを守ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢や希望を持つ。 計画づくりの必要性に気付く、作業の手順が分かる。 学習等の計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来のことを考える大切さが分かる。 憧れとする職業を持ち、今、しなければならぬことを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。 将来の進路希望に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生きがい・やりがいがあり自己を生かせる生き方や進路を現実的に考える。 職業についての総合的・現実的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案する。 将来設計、進路計画の見直し再検討を行い、その実現に取り組む。
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなもの、大切なものを持つ。 学校ですべてよいことと悪いことがあることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 してはいけないことが分かり、自制する。 	<ul style="list-style-type: none"> 係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の個性や興味・関心等に基づいて、よりよい選択をしようとする。 選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任が伴うことなどを理解する。 教師や保護者と相談しながら、当面の進路を選択し、その結果を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 選択の基準となる自分なりの価値観、職業観・勤労観を持つ。 多様な選択肢の中から、自己の意志と責任で当面の進路や学習を主体的に選択する。 進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、実現可能性について検討する。 選択結果を受容し、決定に伴う責任を果たす。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分のことは自分で行おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 自分の力で課題を解決しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習や進路選択の過程を振り返り、次の選択場面に生かす。 よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 課題に積極的に取り組み、主体的に解決していくこととする。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来設計、進路希望の実現を目指して、課題を設定し、その解決に取り組む。 自分を生かし役割を果たしていく上での様々な課題とその解決策について検討する。 理想と現実との葛藤経験等を通して、様々な困難を克服するスキルを身につける。

参考 1	小学校（中学年）における係活動の展開(例).....	50
参考 2	中学校における職場体験活動を中心とした展開(例).....	52
参考 3	高等学校におけるインターンシップを中心とした展開(例)...	54

小学校（中学年）における係活動の展開（例）

係活動は、楽しい学級づくりのために、児童がいろいろな係を自分たちで考え、友達と協力しながら、さまざまな役割（仕事）を体験する活動である。このような活動を通して、児童はそれぞれの役割や役割を果たすことの大切さを理解するとともに、自分のよさを見つけたり、働くことの大切さや成就感を体得したりしていく。その意味で、係活動は職業観や勤労観の基盤を形成するという重要な意義を持っている。

1 学級活動における「係活動」の指導の展開（例）

テーマ…「係活動」をパワーアップしよう（学級活動で「係活動」を企画・決定する）

(1) 指導の展開

活動内容	児童の活動	指導・留意点 【育成したい能力】
やりたい係を決める	<ul style="list-style-type: none"> ・いままでの係の仕事でよかったこと、もっとやりたかった（やってほしかった）こと、もっと合理的にできることなどをみんなと話し合う。 ・やりたい係について発表し合う。 <p>例：</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 花が好きなので、花係になって花壇を花いっぱいになりたいです。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 書くことが得意なので、新聞係になっているいろいろなことをみんなに教えたいです。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体としての活動が充実したものになるよう助言する。【情報活用能力】 【人間関係形成能力】 ・児童一人一人のやる気と考え（計画）を大事にし、できるだけ希望を優先するようにする。 ・なぜその係をしたいのか、理由を考えさせるようにする。【将来設計能力】 【意思決定能力】 ・いろいろな係を経験させ、一人一人の可能性を見いだすことができるよう、たくさんの係をつくるようにする。 ・一か月あるいは学期ごとに交代にするようにする。 ・友達と協力できるよう、二人で一つの係活動を行う。【人間関係形成能力】
楽しい名前付けをする	<ul style="list-style-type: none"> ・各係の名前を考える。 <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 「いきもの係」・動物ランド 「新聞係」・・・ニュースの森 「はいふ係」・・・山猫宅配便 「けいじ係」・・・教室デザイナー 「黒板係」・・・クリーン作戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・各係の活動内容がイメージでき、仕事の楽しさが実感できるような愉快な名前を工夫させる。 ・ふさわしい名前を調べさせる。【情報活用能力】

(2) 職業観・勤労観を育む観点からのねらいと留意点

ア 「やってみたい」、「こんな係があれば便利だ」、「みんなのためになる」、「学級が楽しくなる」係を出し合い、係の仕事内容を充実させ、働くことへの楽しさや協力することの大切さに気づかせるようにする。

イ 係活動は学級生活をよりよくするための自主的な活動が本来の姿であることを踏まえ、児童に考えさせ、自分たちの力で決めさせるようにする。

ウ はじめは、なるべく児童の希望を取り入れるようにし、活動の途中で係を交代するなどして、いろいろな係を体験できるようにする。

エ 学級のみinnで各係の仕事を行うために必要な人員を考えさせ、工夫して協力して取り組めるように働きかけていく。

2 常時の活動における指導の展開例

(1) 指導の展開

活動内容	児童の活動	指導・留意点 【育成したい能力】
係の活動を楽しむための工夫を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・係の活動をもっとよくするためのアイデアを考える。 ・先生や上級生からのアドバイスを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しくよりよい活動にしていくためのヒントを与える。 <p style="text-align: right;">【将来設計能力】</p>
係のピーアールを行う	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会や帰りの会で自分たちの係の活動内容を発表する。(デジタルカメラやビデオの活用) 係の自慢 係クイズなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに認めあい、意欲を高め、自信がもてるような工夫をさせる。 <p style="text-align: right;">【情報活用能力】 【人間関係形成能力】</p>

(2) 職業観・勤労観を育む観点からのねらいと留意点

ア 係活動が主体的で楽しいものになるよう、児童の活動を常に見守りながら、アイデアを提供したり、互いの仕事の内容を紹介し合えるよう工夫をしたりする。

イ そのことによって、他の仕事についても、「楽しそう」、「自分にもできそうだ」などとして興味・関心を広げていくことができるようにする。

ウ 楽しさを味わいながら、「やればできる」、「役に立っている」などの成就感を持てるようにするとともに、仕事に対する責任感を培うよう留意する。

3 児童の発達を評価するに当たっての留意点

一人一人の活動の状況を見守りながら、日常の声かけやアドバイスなどによって、頑張っている点や優れている点などを積極的に評価していくように心掛ける。また、努力が求められる点については、他の係の様子や工夫を紹介するなどしてやる気を喚起する。

自己評価、相互評価は、自分の活動を振り返り、係としての自覚を深めたり、次への意欲を高める上で大きな意味を持っていることから、その適切な活用を図る。その際、できるだけ具体的な項目で児童に評価させるようにする。

例：「係の仕事はうまくできましたか。はじめとおわりを比べてどうでしたか。」

「はじめは忘れることもあったけど、だんだんできるようになった。」

「友だちと協力して楽しくできましたか。」

「友達と協力してできて、楽しかった。」

「他の係の仕事で大変だと思うのは何ですか。」

「係も大変だけど、できそうだった。」など

中学校における職場体験活動を中心とした展開（例）

職場体験活動は、生徒が職業の実際及びそこで働く人々の思いに接し、自らの個性や生き方について考え、学校での学習と将来の職業との関連、社会のルールやマナーの大切さを実感を通して学ぶことができる重要な機会である。既に多くの中学校で実施され、職業観・勤労観等を培う上で大きな成果を上げているが、事前・事後指導等の工夫・改善や教科、道徳等と関連させた取組により、生徒の自己変容により深く結び付くようにすることが大切である。

1 教科・道徳等と関連させた取組計画（例）

(1) 計画の基本方針... 職場体験活動をより効果あるものにし、その成果を生徒の意識の変容や定着に結び付けていくため、事前・事後指導の充実を図るとともに、この活動以前・以後において、特別活動、教科、道徳、総合的な学習の時間等との関連を図って実施する。

(2) 取組計画（例）

	学 級 活 動	教 科 ・ 道 徳 等
以 前	・ 将来の生き方と学ぶ意欲 ・ 職業の世界 「職業とは」、「職業の内容」	道 徳 : 「勤労と奉仕の精神」 技 術 ・ 家 庭 : 「家族と家庭生活」 「家庭の仕事」 社 会 : 「身近な地域の調査」 : 「世界と日本の産業・資源」
職 場 体 験 活 動		
以 後	・ 学ぶための制度と機会 ・ 自分の適性と進路	道 徳 : 「勤労の尊さ」、「生きる喜び」 国 語 : 「心を伝える（相手や目的に 応じた手紙を）」 社 会 : 「私たちの生活と経済」

2 職場体験活動の事前・事後指導の展開（例）

(1) 実施学年・実施期間等 ... 第2学年生徒全員、1～3日間

(2) 事前指導の流れ

- ア 職場体験活動の意義について
- イ 体験する職場の希望調査
- ウ 体験する職場の決定
- エ 体験する職場の調査
- オ 体験先との事前打ち合わせ
- カ 緊急対策マニュアルづくり（「こんなとき、どうする」を考える）
- キ 職場体験に行く際の諸注意（心構え、礼儀、マナー、事故防止等）

(3) 事前指導（「体験する職場の調査、事前打ち合わせ」）の展開（例）

活動内容	生徒の活動	指導上の留意点 【育成したい能力】
訪問先の下調べ	・ 行動プランを立てる。 ・ 訪問先の仕事内容を調べる。 ・ 訪問先への行き方を調べる。	・ 計画的に実行するように助言する。 ・ 情報の収集、整理を効果的に行う方法等についてアドバイスする。 【情報活用能力】
質問を考える	・ 質問カードに記入する。	・ グループ等で相談しながら考えさせる。 【人間関係形成能力】
自己紹介を考え	・ 職場で自己紹介する内容を考	・ 自分のこと、職場を選んだ理由を

る	え、自己紹介カードに記入する。	適切に表現させる。 【情報活用能力】【意思決定能力】
事前打ち合わせ 内容の検討	・打ち合わせ用紙にまとめる。	・様々な内容を検討させ、取捨選択させる。 【意思決定能力】
事前打ち合わせ リハーサル	・各班でリハーサルを行い、相互評価する。(事業主の立場に立って)	・相手に伝えようとする努力を大切にする。 【人間関係形成能力】

(4) 事後指導の流れ

- ア 体験結果をまとめる(「職場体験を通して学んだこと」)
- イ 体験先への礼状の作成
- ウ 体験発表会での発表の準備
- エ 体験発表会

保護者、体験先事業主等の参観を得るようにする。また、多くの生徒が効率的に発表し、聞くことができるよう、いくつかのブース(仕切り・場所)を設け、グループごとにローテーションを行って発表・聴講を行う、ブース探検方式で実施する。

(5) 事後指導「職場体験で学んだこと」の展開例

活動内容	生徒の活動	指導上の留意点 【育成したい能力】
自己評価カードの記入	・自己評価カードに、体験前の準備、体験中、体験後の発表準備を通して学んだこと等を記入する。	・交渉からお礼までの一連の流れの意味を理解・体得できたかを考えさせる。 【情報活用能力】
学級で発表する	・班内でそれぞれが発表する。 ・各班から1名代表を選ぶ。 ・代表が学級全体で発表する。	・発表への工夫・努力を大切にする。 ・自分たちでふさわしい代表を選ぶようにする。 【意思決定能力】 ・他の生徒の体験や発表から学ぶように意識付けをする。 【人間関係形成能力】
感想文にまとめる	・今の生活と職業との関係を考える。 ・「今後に生かすこと」をテーマに感想文を書く。	・今後の生き方を各自でじっくり考えさせる。 ・自己の将来計画に役立たせるよう助言する。 【将来設計能力】

3 生徒の発達を評価するに当たっての留意点

生徒が、活動体験を対象化しその成果を内面化していく過程において、自己評価は大変重要な役割を果たす。このことを踏まえ、アンケートやワークシートによって、自分の取組を振り返らせたり、感想文等により、何を学んできたか、これからどんなことを学びたいか、今後に生かすことは何かなど、成果を確認したり将来の展望を考えさせたりするようにする。

生徒が自分自身を適切に評価する力を培うことができるよう、各活動に取り組む姿勢や技能等について、適宜、相互評価を行わせたり、教員からの評価を伝え、励ましたり助言したりする。

生徒の活動の様子や変容の状況について、事業者や保護者に簡単なアンケートを実施して、多面的に生徒の成長・発達を見ていく。

高等学校におけるインターンシップを中心とした展開（例）

インターンシップには、中学校の職場体験活動と同様、職業観・勤労観等を育成する上で大変大きな役割を果たすことが期待されている。学科等によってそのねらいや目的も異なってくるが、実施に当たっては、生徒の発達段階、中学校の体験やその成果等を踏まえ、職業や職業生活についてのより現実的な理解、自己の能力・適性についての理解の深化、将来の進路の現実的な探索に資することなどを基本に据え、指導計画・方法等の工夫・改善を進めることが大切である。

1 インターンシップにかかる指導計画例

(1) 計画の基本方針... インターンシップをより効果的に実施し、その成果を進路の探索に活用したり自己変容に結びつけたりしていくため、進路に関する学習の一連の取組の中にインターンシップを適切に位置づけるとともに、十分な事前・事後指導を行う。

(2) 実施学科、実施学年、実施期間等... 普通科、第2学年生徒全員、5日間

(3) 事前の諸活動と事前指導

- ア 職業適性検査の実施
- イ 職業人インタビューの実施
- ウ インターンシップの意義等についての理解
- エ インターンシップ実施先についての希望調査
- オ インターンシップ実施先の決定
- カ インターンシップ実施先への依頼、事前打ち合わせ
- キ 心構え、マナー、健康・安全等についての指導

(4) 事前の諸活動の展開例（概要）

活動内容	生徒の活動	指導・留意点 【育成したい能力】
職業適性検査の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・職業適性検査を受け、自己の適性について、客観的な理解を深める。 ・（希望者は、検査結果の分析や活用の仕方などについて、個別に相談する。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な職業に求められる適性や能力、自己の適性等への関心や理解を深める契機として活用する。 【人間関係形成能力】 ・検査は、客観的な理解を深める一つの参考であること、自己の適性や能力、職業の内容は変化すること等について理解させる。 【情報活用能力】【将来設計能力】
職業人インタビューの実施	<ul style="list-style-type: none"> ・関心のある職業に就いている職業人を見つける。 ・電話等で趣旨を説明し、アポイントをとる。 ・職場等を訪問し、インタビューする。 ・結果をまとめ、クラスで発表しあう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実現可能性等を考慮し、どのような人を選ぶかを各自で考えさせる。 【意思決定能力】 ・アポイントのとり方やインタビューの仕方等について指導する。 【人間関係形成能力】 ・ワークシートを準備し、インタビューの項目や是非聞きたいこと等を整理させる。 【情報活用能力】

(5) インターンシップの事前指導の展開例（概要）

活動内容	生徒の活動	指導上の留意点【育成したい能力】
インターンシップの意義の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップの趣旨等の説明を聞く。 ・先輩の体験発表会に参加し、活動をイメージする。 ・どの事業所等でインターンシップを行いたいのか、何を学んできたかなどについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップを実施する趣旨を説明する。 ・生徒のモチベーションを高めるよう、実習風景などの映像記録などを活用する。【情報活用能力】 ・自分の希望する将来の職業と関連させて考えさせる。【意思決定能力】
就業に当たっての心構えやマナー	<ul style="list-style-type: none"> ・健康・安全、事業所の活動や方針に対する理解を深める。 ・あいさつ、身だしなみ、言葉使い等の大切さを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校外での活動であることを認識させ、就業に当たって求められる心構えや態度を具体例をあげて指導する。【人間関係形成能力】

(6) 事後の諸活動と事後指導

- ア 体験先への礼状の作成
- イ 様々な職業に必要な能力・資格
- ウ 職業における専門性と上級学校等での学習
- エ ライフプランづくり
- オ 報告会の実施

(7) 事後指導「様々な職業に必要な能力・態度」の展開例

活動内容	生徒の活動	指導上の留意点【育成したい能力】
体験した職業に必要な能力等をまとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに別れ、インターンシップを通して必要だと気付いた技能等を各自で付箋紙に記入する。 ・各自があげた技能を発表する。 ・グループで相談しながら、付箋紙を模造紙に貼る作業を通して、類似の技能等を整理する。 ・それらの技能・資格を得るためには、どこで(高校、上級学校や職場等)、どのように学んでいけばよいかをグループで調べてまとめる。 ・学級で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気付いたことをできるだけ多くあげるように指示する。【情報活用能力】 ・なぜそう思ったのかを、生徒が互いに確かめ合いながら作業を進めるようにさせる。【人間関係形成能力】 ・必要に応じ、資格や検定制度の詳細を調べさせる。 ・一つのルートだけでなく、なるべく複数のルートをあげることに留意する。【将来設計能力】 【情報活用能力】

2 生徒の発達を評価するに当たっての留意点

体験日誌やワークシート、報告書の作成やグループワーク等を通し、インターンシップを通して学んだことについて、職業に必要な態度やスキル、専門性や技能等、自己の能力・適性との関係などに整理させ、より分析的・具体的・客観的に自己評価できるように工夫する。

これらや日頃の観察をもとに、適性や職業の世界についてのより幅広い的確な理解、現実的に進路を探索する力などの向上といった観点を中心に、個々の生徒の取組についての評価を行い、適宜、これを生徒に返していく。

参 考 资 料

報 告 の 概 要